

初年次必修科目「地域学入門」における地域学部新入生の変容 (第2報) —2010年度における授業実践のまとめ—

渡部 昭男*・竹川 俊夫**・足立 和美*・鶴崎 展巨***¹

The Change and Growth of New Students of the Faculty of Regional Sciences
through a Compulsory First-Year Subject of “Introduction to Regional Sciences”:
The Second Report on Classroom Practice in the School Year 2010

WATANABE Akio*, TAKEGAWA Toshio**, ADACHI Kazumi*, TSURUSAKI Nobuo***

キーワード：鳥取大学 地域学部 地域学入門 初年次教育 学級担任（支援）制

Key Words : Tottori University, Faculty of Regional Sciences, Introduction to Regional Sciences, first year
education/experience, support system by class teacher

1. はじめに

鳥取大学地域学部（入学定員190人）における初年次必修科目「地域学入門」は、地域学部が学年進行でスタートした2004年度から開講しており、2010年度で7年目を迎えた。2008年度より共同執筆者の一人である渡部がチーフを務めており、「地域学」を入門的に講ずるとともに、さらに新入生の変容を企図した参加型・ゆさぶり型の授業展開を志向してきた。

本稿では、『地域学論集』6巻2号²に収録した第1報に引き続き、2010年度の「地域学入門」における新入生の変容をまとめる。その上で、初年次教育であることを意識して2010年度から各学科・コースの学級担任が支援する体制を採ったことについて、その成果と課題を明らかにする。

2. 2010年度新入生の状況

(1) 入学者の状況

2010年度の入学者の状況を、4つの学科別に述べる。

- ・地域政策学科（入学定員49）——A O入試：入学手続き者7／募集人員6（以下同様に、入学手続き者／募集人員）、推薦Ⅰ（大学入試センター試験を課さない）：4／3、私費外国人留学生：2、前期37／30 [志願者倍率は4.6倍]、後期：9／10 [同32.6倍]、入学者計59（うち県内17 [28.8%]、男性41 [69.5%]）。
- ・地域教育学科（入学定員49）——A O入試：5／4、私費外国人留学生：1、前期：40／35 [志願者倍率は3.3倍]、後期：8／10 [同22.5倍]、入学者計54（うち県内20 [37.0%]、男性18 [33.3%]）。
- ・地域文化学科（入学定員48）——A O入試：4／4、推薦Ⅱ（大学入試センター試験を課す）：4／4、

¹ 鳥取大学地域学部教授（地域教育学科） **講師（地域政策学科） ***教授（地域環境学科）

² 渡部昭男・竹川俊夫・土井康作・野田邦弘・岡田昭明（2009）「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容—2009年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』6（2）、pp.69-104。

特別入試（帰国子女）：1，私費外国人留学生：1，前期：31/26 [志願者倍率は3.4倍]，後期：11/14 [同12.6倍]，入学者計52（うち県内21 [40.4%]，男性17 [32.7%]）。

・地域環境学科（入学定員44）——AO入試：7/5，推薦Ⅱ：3/5，前期：34/27 [志願者倍率は9.3倍]，後期：5/7 [同30.4倍]，入学者計49（うち県内11 [22.4%]，男性21 [42.9%]）。学部トータルの入学者は214人（定員充足率113%）である。性別では，男性は77人（36.0%）と4割弱であり，女性が多い。入試別の内訳では前期入試が142人（66.4%），後期入試が33人（15.4%），AO入試が23人（10.7%），推薦入試が11人（5.1%），私費外国人留学生が4人（1.9%），帰国子女が1人（0.5%）であり，一般入試が約8割，AO・推薦などが約2割を占めた。また，県内者は69人（32.2%）であり，およそ3分の2は県外出身者であった。講義では，こうした多様性を上手く活かすよう心がけた。

（2）新入生アンケートの結果からみた4学科の特徴

地域学部では，2010年度の新入生を対象に「新入生アンケート」を実施した（実施者・地域学部入試部会）。

○実施年月：2010年4月

○回収状況：地域政策学科57/59人（96.6%），地域教育学科54/54人（100%），地域文化学科50/52人（96.2%），地域環境学科49/49人（100%），学部計210/214人（98.1%）。

○設問：「1 性別」「2 所属学科」「3 出身高校の所在地」「4 現役・浪人の別」「5 入試の種類」「6 学部志望の理由」「7 入試情報源」「8 学部選択の時期」「9 卒業後の進路希望」の9項目。

○結果：

設問の内，「6 学部志望の理由」「8 学部選択の時期」「9 卒業後の進路希望」の3項目の結果を述べる。

質問6 地域学部を選ぶにあたって一番重視したのはどれでしたか。一つだけ選んでください。
1 志望する職業との関係 2 自分のやりたい勉強ができるから 3 入試の難易度 4 親の希望 5 高校（予備校）の進路指導ですすすめられた 6 学部の社会的評価 7 その他

質問8 地域学部への受験はいつごろ決めましたか。一つだけ選んでください。

1 高校1・2年生の間に 2 高校3年生夏までに 3 高校3年生秋からセンター試験受験前までに 4 センター試験受験後に 5 その他

質問9 あなたは地域学部卒業後の進路をどのように考えていますか。一つだけ選んでください。

1 民間企業 2 公務員 3 教員 4 保育士 5 大学院への進学 6 その他

・地域政策学科（有効回答57）——志望理由は「自分のやりたい勉強ができるから」が16件（28.1%，昨年比-9.6ポイント [以下同じ]）と第一位であり，ついで「志望する職業との関係」が14件（24.6%，-1.8），「入試の難易度」が14件（24.6%，+3.8）であった。選択の時期は，「センター試験受験後に」が35件（61.4%，+14.2），他の項目選択（センター試験以前等）が計22件（38.6%，-14.2）であり，「センター試験受験後に」が昨年度よりも増えて6割強となった。なお，めざす職業は「公務員」が36件（63.2%，+2.8）と6割を占めており，他は「民間企業」12件（21.1%，-0.3），「教員」5件（8.8%，-0.6），「大学院への進学」3件（5.3%，-4.1）であった。

・地域教育学科（有効回答54）——志望理由は「志望する職業との関係」が31件（57.4%，+2.1）

と過半数を越えており、他学科と比べて特徴的であった。ついで、「入試の難易度」が11件（20.4, +1.3）であった。他の2学科では第一位の「自分のやりたい勉強ができるから」は6件（11.1%, -1.7）に留まっており、これもまた特徴的であった。選択の時期は、「センター試験受験後に」が32件（59.3%, -17.3）であり、昨年度よりは減ったものの約6割に上った。一方で、「高校1・2年生」10件と「高校3年生夏までに」7件とで小計17件（31.5%）であり、早い段階で志望先を定めている傾向もうかがえた。進路希望は「教員」が35件（64.8%）、「保育士」が11人（20.4%）と圧倒的に多く（「保育士」を選択肢に置かなかった昨年度は「教員」が80.9%であったのに対して、今年度は「教員」「保育士」双方を合わせて85.2%, +4.3）、他は「公務員」4件（7.4%, -1.1）、「大学院への進学」2件（3.7, +1.6）等であった。

- ・地域文化学科（有効回答50）——志望理由は「自分のやりたい勉強ができるから」が23件（46.0%, +8.5）と第一位であり、ついで「志望する職業との関係」が10件（20.0%, -7.1）であった。選択の時期は、「センター試験受験後に」は25件（50.0%, +10.4）というように、昨年度より増えて半数になった。一方で、「高校1・2年生」4件と「高校3年生夏までに」9件とで小計13件（26.0%, -9.6）であった。進路希望は「公務員」16件（32.0%, -3.4）と「教員」16件（32.0%, +19.5）とを合わせると約3分の2を占めていた。他には、「民間企業」13件（26.0%, +1.0）、「大学院への進学」3件（6.0%, -2.3）であった。
- ・地域環境学科（有効回答49）——志望理由は、昨年度は第一位であった「自分のやりたい勉強ができるから」は11件（22.4%, -23.6）へと半減してしまった。代わって、「入試の難易度」が21件（42.9%, +12.9）で4割強となり、4学科中で最多となった。一方、「志望する職業との関係」は4件（8.2%, -3.8）であり、4学科中で最も低かった。選択の時期は、「センター試験受験後に」が31件（63.3%, +11.3）であり、昨年度より増えて6割強となった。進路希望は「公務員」が25件（51.0%, +21.0）「民間企業」が15件（30.6%, -1.4）であり、合わせて8割を占めていた。他は、「教員」4件（8.2%, -7.8）、「大学院への進学」2件（4.1%, -11.9）であった。

3. 2010年度の講義概要

(1) 1年生学級担任による受講生支援の方式

地域学部長が会長を務め、学部の全教員を構成メンバーとした「地域学研究会」があり、10名程度の「幹事会」が中心となって学部必修科目である「地域学入門（1年次前期）」「地域学総説（3年次前期）」の企画運営を担っている。

昨年度の「地域学入門」は、渡部を統括担当者とし、各学科の幹事1名ずつが学科世話人を務めた。これに対して、2010年度は、統括責任者は渡部が、また竹川俊夫（地域政策学科）も引き続き幹事として学科世話人を担当したが、「初年次教育」の側面を重視して、その他の学科・コースは1年生学級担任が担当した。すなわち、足立和美（地域教育学科）、茨木透（地域文化学科）、平井覚（同・芸術文化コース）、鶴崎展巨（地域環境学科）である。1年次前期には、全学共通科目の「入門的科目」として「大学入門ゼミ」「情報リテラシー」（各2単位）が設けられており、「大学入門ゼミ」は1年生学級担任が担当する形で学科ごとにクラス編成されている。従って、1年生担任は、共通教育科目である「大学入門ゼミ」と専門科目である「地域学入門」の双方を連携させつつ、新入生の学習及び生活を支援できることとなった。

なお、昨年度と同様に、統括担当者は、各回の資料の準備手配と配布、総合司会、出席カードやレポートの回収、学科世話人への配達、新入生アンケートや授業評価アンケートの配布・回収など

2009年度前期(水2限・共通A20教室) 地域学入門

渡部昭男 akiowtnb@rstu.jp**第1部 「地域学」とは何か**

- 4/08 1. 地域学について 光多長温 (鳥取大学・特任教授)
 4/15 2. 地域で生きる 吉村伸夫 (地域文化・教授)
 4/22 3. ローカルとグローバル 仲野 誠 (地域政策・准教授)

【第1回レポート(20点)】

課題:「地域学」とは何か…連休に帰省したら家族や友人から「地域学って何?」と尋ねられました。3回の講義をベースに、鳥取大学の考える「地域学」について簡潔に説明しましょう。

- * 提出: 5/13 (水) 講義終了時・・・初回レポートはワープロソフトの「書式設定」等の演習も兼ねています。
- * 体裁(書式設定): A4判縦1枚、40字×43行横書き、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載、本文40行以内。

第2部 地域の課題と地域連携

*印は外部講師

- 5/13 4. 鳥取大学の地域連携活動 野田邦弘 (地域文化・教授) + *辻聖太郎 (大阪市大大学院生)
 5/20 5. 歴史からみる鳥取の地域性 *谷口肇 (元鳥取東高校教諭) + 土井 (地域教育)
 5/27 6. 地域の課題と教育—コミュニティスクール *杉本由香里 (南部町教育委員会) + 渡部 (地域教育)
 6/03 7. 中間まとめ (学生参加によるディスカッションを含む)
 6/10 8. 地域の生き残り戦略 *山内道雄 (海士町長) + 家中 (地域政策)
 6/17 9. 地域と農業の再生 *小田切徳美 (明治大学農学部教授) + 筒井 (地域政策)

【第2回レポート(40点)】

課題:「地域課題」をつかむ…「地域づくり」は「地域課題」をつかみ、共有する作業から始まります。

4～9回の講義においてどのような「地域課題」「地域連携活動」が提示されたかをまず整理した上で、その関心のある課題一つに絞り、さらに発展させて論述しなさい(1～3回の講義を含めてもOKです)。

- * 提出: 6/24 (水) 講義終了時・・・2回目レポートは「両面印刷」の練習も兼ねています。
- * 体裁: A4判1枚の両面印刷、40字×43行、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載。およその分量配分は、表面が講義の整理、裏面は関心のある課題に関する論述+参考文献やURLなど。

第3部 「地域づくり」の実践

- 6/24 10. 鳥取県の課題と産業 *金田昭 (財)鳥取県産業振興機構理事) + 土井 (地域教育)
 7/01 11. 地形からみる鳥取の地域性 矢野 (地域環境)
 7/08 12. 地域をデザインする *吉田幹夫 (地域デザイン研究所) + 吉村 (地域文化)
 7/15 13. 鳥の劇場の実験 *中島諒人 (鳥の劇場主宰) + 新倉 (芸文センター)
 7/22 14. ものづくり道場の実験 土井 (地域教育)

【第3回レポート(40点)】

課題: 取り組んでみたい「地域づくり(人づくり)」…地域学部では「地域づくり」や「地域における人づくり」に取り組む志と能力のある人材を養成します。「地域学入門」を受講して、どのような「地域づくり(人づくり)」に取り組んでみたい(または在学中に学習・研究してみたい)と思いましたか。

- * 提出: 7/29 (水) 講義終了時
- * 体裁: A4判1枚両面、40字×43行、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載、本文83行以内。

- 7/29 15. 総合討論=全体ディスカッション

◎総括=渡部(教育)、各学科=竹川(政策)、土井(教育)、野田(文化)・新倉(芸文センター)、岡田(環境)、学科担当の先生が1)感想文での出欠確認、2)レポートの採点などを行います。何でも気軽に相談しましょう!

◎TA=伊藤さん(地域政策M2院生)

◎90分の配分=15分(予習事項の発表)+60分(講師の講義)+15分(質疑応答&感想文記入)

◎受講生へ: ①予習事項が毎回あり、当日は各学科から1名が出て発表します。②感想文(質問)を毎回提出して下さい。③4回以上欠席すると「未履修」扱いとなります。④レポート3回の課題と配点は上記の通りです。

2010年度前期（水2限・共通A20教室） 地域学入門 2010.4.14.

第1部 「地域学」とは何か

- 4/14 1. 地域学について 光多長温（鳥取大学・特任教授）
 4/21 2. 地域で生きる 吉村伸夫（地域文化・教授）
 4/28 3. ローカルとグローバル 仲野 誠（地域政策・准教授）

【第1回レポート（20点）】～1冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと（レポートの末尾に参考図書に記載）。

課題：「地域学」とは何か…連休に帰省したら家族や友人から「地域学って何？」と尋ねられました。3回の講義をベースに、鳥取大学の考える「地域学」について簡潔に説明しましょう。

- * 提出：5/12（水）講義終了時・・・初回レポートはワープロソフトの「書式設定」等の演習も兼ねています。
- * 体裁（書式設定）：A4判縦1枚、40字×43行横書き、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載、本文40行以内。

第2部 鳥取大学の地域連携活動

*印は外部講師

- 5/12 4. 大学と学生の立場からの地域連携活動 野田邦弘（地域文化・教授）+*辻堅太郎（大阪市大大学院・院生）
 5/19 5. 鳥取大学と明治大学との連携活動 *水野勝之（明治大学商学部・教授）+野田
 5/26 6. ものづくり道場の実験と因幡の手づくりまつり 土井康作（地域教育・教授）+先輩学生
 6/02 7. 中間討論（学科世話人 vs 受講生）

※論点：第1レポートの好評・第2レポートへの期待+地域連携活動について

【第2回レポート（40点）】～新たに1冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと（同）。

課題：「地域連携活動」への期待と関与・・・4～6回の講義においてどのような「地域連携活動」が提示されたかをまず整理した上で、地域学研究会のサイトで紹介されている「地域連携活動」も参照しつつ、鳥取大学の地域連携活動への期待や自らの関与について述べなさい。

- * 提出：6/16（水）講義終了時・・・2回目レポートは「両面印刷」の練習も兼ねています。
- * 体裁：A4判1枚の両面印刷、40字×43行、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載。およその分量配分は、表面が講義の整理、裏面は関心のある課題に関する論述+参考文献やURLなど。

第3部 「地域づくり」の実践

- 6/09 8. 鳥取砂丘の自然を読み解く：動物のインベントリから鳥取砂丘検定まで 鶴崎展巨（地域環境・教授）
 6/16 9. アートの方で地域を変える *北川フラム（大地の芸術祭総合ディレクター）+野田
 6/23 10. 地域の生き残り戦略 *山内道雄（海士町長）+竹川俊夫（地域政策・講師）
 6/30 11. コミュニティスクールの挑戦 *杉本由香里（南部町教育委員会）+渡部昭男（地域教育・教授）
 7/07 12. 景観から読む鳥取の風土と人々の暮らし 小玉芳敬（地域環境・教授）
 7/14 13. 鳥の劇場の実験 *中島諒人（鳥の劇場・主宰）+新倉健（芸文センター・教授）
 7/21 14. 総合討論（学科世話人 vs 受講生）

※第2レポートの好評・最終レポートへの期待+「地域づくりの実践」について

【第3回レポート（40点）】～新たに2冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと（同）。

課題：「地域学」と「地域づくり・人づくり」…地域学部では「地域づくり」や「地域における人づくり」に取り組む志と能力のある人材を養成します。「地域学入門」を受講して、どのような「地域づくり（人づくり）」に取り組んでみたい（または在学中に学習・研究してみたい）と思いましたか。「地域学」の可能性と重ねて述べなさい。

- * 提出：7/28（水）講義終了時
- * 体裁：A4判1枚両面、40字×43行、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載、本文83行以内。

- 7/28 15. 総括レクチャー 「地域学とは何か」＝第1部担当者による総括の講義（またはパネル討論）

◎総括＝渡部 各学科世話人＝竹川（政策）、足立（教育）、茨木（文化）・平井（センター）、鶴崎（環境）。

◎TA＝寺岡（院生・地域教育専攻M2年生）

◎90分の配分＝15分（予習事項の発表）+60分（講師の講義）+15分（質疑応答&感想文記入）

◎受講生へ：①各学科から1名が出て毎回発表。②感想文（質問）を毎回提出。③4回以上の欠席は未履修扱い。

◎講義2単位＝「{授業1コマ（2時間換算）+4時間の自習}×15回」の計90時間～4冊以上の文献を読破！

を行った(学科別に提出された出席カード及びレポートはティーチングアシスタントTAの院生が学籍番号順に整理する)。学科世話人は、毎回の出席カードによる出欠確認(欠席が嵩む学生への連絡や相談を含む)、3回のレポートの採点、学期末の成績評価とパソコン入力などを担った。各回の講師(学外の特別講師を含む)には1週間前に資料原版(可能な限りA3版1枚両面の分量)の提出をお願いし、TA院生が事前に250部を印刷した(受講生約230人+スタッフ+公開参加者など/昨年度は余った講義資料を学部教員のレターケースに配布したが、2010年度はPDFファイルなどによる全教員へのメール配信に切り替えた)。なお、学外の特別講師を紹介いただいた学部教員には特別講師担当をお願いし、事前の遣り取り、当日の出迎え、講義室への案内、使用機器の調整、講義後の控え室への案内、受講生の感想(出席カードの複写一式)の手渡し、見送り等を分担してもらった。こうした「分担&連携の仕組み」をきちんと構築してさえおけば、各年度で入れ替わる学級担任がはじめて学科世話人を引き受ける際にも無理がない。

(2) シラバスの概要

昨年度(前々頁のシラバス2009を参照のこと)をほぼ踏襲して、2010年度の「地域学入門」(前頁のシラバス2010を参照のこと)も三部構成とした。すなわち、第1部『『地域学』とは何か』(昨年度に同じ)、第2部「鳥取大学の地域連携活動」(昨年度は「地域の課題と地域連携」)、第3部『『地域づくり』の実践』である。

第1部は、担当スタッフも講義タイトルも2009年度と全く同じである。すなわち、1「地域学について」(光多長温特任教授)、2「地域で生きる」(吉村伸夫教授)、3「ローカルとグローバル」(仲野誠准教授)という、3回セットメニューである。

定番化のメリットとしては、スタッフ側に「絆」とでもいべき連帯感が生まれ、3回の講義でどう連携して新入生を揺さぶり育てるかという見通しが持てることである。また、学生側にとっても入学直後の4月に、高校までとは異なる「理論」「原論」的な講義にふれる強烈な共通体験となり、「光多先生の『横申論』、吉村先生の『ノーム(ノルム)論』、仲野先生の『構造・関係論』」などをベースに『『地域学』とは何か』について学年を越えて語り合えることである。

一方、マンネリズムに陥らないように、1) 講義内容を毎年度少しずつ修正する、2) 3人のスタッフが第1部を通して参加し、他スタッフの修正点や学生の反応の変化を確認する等に心がけている。例えば、仲野准教授は、当日の講義タイトルを「グローバルとローカル—<地域>をみるもうひとつの視点—」に修正し、光多教授がふれた「地域学の特徴としての利他主義」に関連させて、「幸福」(幸福のパラドックス、幸福の相対化)について言及している。また、吉村教授は、自身の講義に寄せられた感想や質問に対して翌週には、「全般的感想、ひとつの問への回答、聞き捨てならない言葉へのコメント、そしてアドバイス」(4/28配布)と題した受講生への熱いメッセージを寄せている。仲野准教授についても、「4月28日『地域学入門』の授業の補足および簡単なコメント」(講義の論理構成、講義のねらい(の補足)、「最初の一撃」としての授業、「社会を変えたい」?、最後に：人が幸せになるための学問、の5部構成)を作成している(5/12配布)。

第2部は、昨年度は6回を第2部に割り当てたが、まとまりに欠けるきらいもあったので、南部町や海士町の取り組みは第3部に回し、2010年度はシンプルに4回とした。すなわち、4「大学と学生の立場からの地域連携活動」(野田邦弘教授、辻堅太郎氏[地域学部卒業生、大阪市立大学院生])、5「鳥取大学と明治大学との連携活動」(水野勝之教授[明治大学])、6「ものづくり道場の実験と因幡の手づくりまつり」(土井康作教授)、そして第1・2部を通した「中間討論会」である。

「地域学研究会」の副会長も務める野田教授は、「大学の機能」を「知の創造（研究）」「知の伝承（教育）」「知の活用（地域貢献）」の三位一体において捉え、「地域貢献・地域連携活動」が「大学の機能」に不可欠であることを述べた上で、「鳥取大学の地域連携活動」の全体像を分かりやすく説明した。辻氏は在学中から取り組んでいる様々な地域連携活動について映像を交えて紹介し、後輩たちに地域連携活動への参加を呼び掛けた。先輩の話を通して、受講生は「学生による地域連携活動」の意義と面白さをまず感じとり、何かやりたい・やれそうだという気持ちを膨らませたようだ。続いて、水野教授の「鳥取大学と明治大学との連携活動」で視野を一旦外に向けさせ、そして土井教授の「ものづくり道場の実験と因幡の手づくりまつり」の話で鳥取に再度引き戻す手法を採った。土井教授が主催する「第14回因幡の手づくりまつり」（鳥取市智頭街道商店街にて5/30開催）には、相当数の地域学部生が参加した。

「手づくりまつり」ポスター



第3部は、学内外を問わずユニークな『『地域づくり』の実践』を、各学科・コースから推薦してもらって組み立てた（第1・2部に扱う回数が少なかった地域環境学科のみ2枠を割り当てて他は1枠）。すなわち、8「鳥取砂丘の自然を読み解く」（鶴崎展巨教授／地域環境学科枠）、9「アートの方で地域を変える」（北川フラム氏[大地の芸術祭総合ディレクター]／地域文化学科枠）、10「地域の生き残り戦略」（山内道雄氏[海士町長]／地域政策学科枠）11「コミュニティスクールの挑戦」（杉本由香里氏[南部町教育委員会主事]／地域教育学科枠）、12「景観から読む鳥取の風土と人々の暮らし」（小玉芳敬教授／地域環境学科枠）、13「鳥の劇場の実験」（中島諒人氏[鳥の劇場主宰]／芸術文化コース枠）の6回である。

鶴崎・小玉教授の講義は、地域学部スタッフの研究が地域学とどのように結びつくのかという具体例の提示であるとともに、共に学ぶこの「鳥取の地」について、鳥取大学ならではの専門分野「地域環境学」から知見を広めてみようとの意味合いを持たせている。また、「地域づくり・人づくりのキーパーソン」として活躍中の特別講師4名の話は、新入生にとってインパクトの大きいものであった（山内・杉本・中島の3名は昨年引き続きの登壇である）。ところで、第3部の各回は、推薦枠の学科・コースに属する受講生の関心が高かったことは言うまでもないが、他の学科・コースからも「面白かった」「もっと知りたい」等の感想が多く寄せられた。

最終盤は、「総合討論会」で終わりとなった昨年度は「地域学入門」としての最後の押さえが弱かったのではないかとという反省から、14「総合討論会」を踏まえた上で、15「総括レクチャー」を新たに位置付けた。「中間討論会」「総合討論会」については、後の章で詳しく述べる。

4. 講義の構造化及び配布資料等

(1) 講義の構造化

昨年度の報告と重なるが、「講義の構造化」について述べておく。

○教室空間：地域学部棟に隣接した共通教育棟の2階「A20教室」で、約300人が収容できる階段教室である。学科ごとの一体感の醸成、資料配付や感想カードなどの学科別回収に便利のように、着席は学科別に縦列に指定した（正面からみて右側から地域政策学科・地域教育学科・地域文化学科・地域環境学科）。

○時間配分：1コマ90分の構成を、「①予習事項の発表（15分）—②講師の講義（60分）—③質疑

応答&感想文記入 (15分)」とした。時間の流れでみると、10:30頃～受講生の着席を待って資料配付 [統括担当者等]、10:35頃～予習事項について代表学生が前に出て発表 (一人2～3分) [司会は統括担当者]、10:30頃～並行してマイクやパソコンなど講義用の機器の調整 [TA, 講師 (特別講師の場合は+特別講師担当者)]、10:45頃～講師の紹介 (統括担当者または学生)、10:45頃～講義、11:45頃～出席カードに感想等を記入しながら質疑応答 (司会は統括担当者)、11:55頃～出席カードの回収、という具合である。「地域学研究会」や地域学部上級生から催し等の案内がある場合は、始まりまたは終わりの時間帯に随時組み入れた。

○出欠確認：出欠は毎回提出する「出席カード」で確認した。1/5を越える4回以上欠席すると評価対象外となるので、欠席が高んできた時点で学級担任から連絡を入れて、支援してもらった。

○視覚的支援：鳥取大学においても、要請のあった発達障害学生への支援を始めるようになっていく。「地域学入門」では、時間配分の構造化、講義資料の印刷配布、ユニバーサルな視覚的支援などを意識的に行った。すなわち、まず講義開始時には、前面にある黒板 (上下移動式) の右側3分の1のスペースに「配布物一覧」、中央のスペースに「本日の発表者」、左側3分の1のスペースに「次回の発表者」を書き、見やすく示した。また、講義終了時の出席カード・レポートの回収に際しては、教壇上の回収場所に「学科名」用紙を置いて提出位置を明示した。

こうした「講義の構造化」は、「総括担当者」が将来的に交代する場合においても、引き継ぎを容易にすることができよう。

(2) 配付資料等

ここでは、各回の配布資料 (○印) 及び予習課題 (☆印) を一覧にしておく。

1. 地域学について (光多長温)

○A3判1枚両面=目次:1.地域学とは、2.地域学の歴史、3.なぜ地域学か、4.地域学の特質、講師紹介記事。

○A4判1枚両面=渡部～講義シラバス+「地域学入門2010推薦図書」リスト
☆ネットで「光多長温教授」を検索してみよう。

2. 地域で生きる (吉村伸夫)

☆ネットで「吉村伸夫教授」を検索してくる。

○A3判1枚両面=目次:1.二つの大事な概念(「地域」と「文化」)、2.「地域」とは「中央対地方」に対抗する視点でもある、3.地域学は何のために?、4.鳥取は諸君の実習フィールド、5.「地域」は「人間」製造装置でもある、メッセージ、講師紹介記事。

3. ローカルとグローバル「ここ」をみる視点一 (仲野 誠)

☆ネットで「仲野誠准教授」を検索してくる。

○A3判1枚両面=目次:タイトル変更「グローバルとローカルー<地域>をみるもうひとつの視点一」授業のねらい、0.はじめに、1.ローカルのグローバルな基礎とグローバルのローカルな基礎、2.わたしたちの欲望の帰結ー幸福のパラドックスー、3.幸福の相対化、4.おわりに。

○A3判1枚両面=吉村～出席カードへのコメント・アドバイス、渡部～第①レポートに向けて

4. 大学と学生の立場からの地域連携活動 (野田邦弘+辻堅太郎)

☆ネットで「野田邦弘教授」「辻堅太郎氏」を検索してくる。

- A3判1枚両面＝野田～「鳥取大学の地域連携活動」目次：1.大学と地域，2.知と実践の融合をめざす鳥取大学，3.学生の地域活動，4.地域に開かれた21世紀の大学，講師紹介記事。
- A3判1枚両面＝辻～「学生の立場からの地域連携活動」目次：0.自己紹介，1.地域連携活動って何？，2.地域連携活動事例紹介，3.地域連携活動の経験をいかした政策提言活動，4.まとめ，5.新入生のみなさんへのメッセージ，特別講師紹介記事。
5. 鳥取大学と明治大学の連携活動（水野勝之）
- ☆ネットで「鳥取大学・明治大学連携協定」を検索してくる。
- A3判1枚両面＋1枚片面＝パワーポイントのスライド資料
- A3判1枚片面＝「鳥取市報」辻氏の取材記事
6. ものづくり道場の実験と因幡の手づくりまつり（土井康作）
- ☆ネットで「土井康作教授」を検索してくる。
- パンフ「ものづくり道場の創設」
- A3判1枚両面＝目次：1.君たちは知っていると思う，2.道具はすごい！知恵の結晶，3.地域にはいることとは，4.地域の生活にはいる条件
7. 中間討論会（渡部昭男ほか）
- A3判1枚両面＝「地域学部新入生アンケート」の結果概要
- A4判1枚両面＝渡部～中間討論会の進め方，第②レポートに向けて，第1回地域学研究会大会案内チラシ
8. 鳥取砂丘の自然を読み解く—動物のインベントリーから鳥取砂丘検定まで—（鶴崎展巨）
- ☆中間討論に対する感想・意見の発表。
- A3判1枚両面＝目次：1.鳥取砂丘のプレデター（捕食者）に学ぶ生態学，2.鳥取砂丘の動物のインベントリーと保全，3.鳥取砂丘検定
- A3判1枚両面＝渡部～地域環境学科に関する資料
- A3判1枚両面＝光多教授よりの補足資料～「下河辺淳氏『21世紀の人と国土』講演概要」
9. アートの力で地域を変える（北川フラム）
- ☆事前調査隊～北川氏について発表。
- A3判1枚両面＝特別講師の紹介記事，大地の芸術祭，瀬戸内国際芸術祭
- 瀬戸内国際芸術祭のチラシ，「こえび新聞」など
10. 地域の生き残り戦略（山内道雄）
- ☆事前調査隊～山内氏について発表。
- A3判3枚両面＝「離島発！地域再生への挑戦～最後尾から最先端へ～」目次：0.はじめに，1.行財政改革（短期戦略），2.産業振興（長期戦略），3.定住促進（中期戦略），4.人づくりと交流，5.最後尾から最先端へ—サステイナブルな島づくり／「人がつながり，人が人を連れてくる。必ずしも定住にこだわりません」記事
11. コミュニティスクールの挑戦（杉本由香里）
- ☆事前調査隊～コミュニティスクールについて発表「コミュニティスクールとは」（A3判1枚両面）。
- A3判2枚両面＝「コミュニティスクールの取り組み」スライド資料，教育委員会だより，南部町の概要・沿革，南部町観光協会のサイト資料
12. 景観から読む鳥取の風土と人々の暮らし（小玉芳敬）

☆事前調査隊～小玉教授について発表。

○A3判2枚両面＝目次:1.鳥取県－主に3つの流域で構成される, 2.千代川流域の山景観, 3.広義の鳥取砂丘, 4.狭義の鳥取砂丘がかかえる課題, 講師の紹介。

○B4判1枚両面＝小玉芳敬「砂丘開発」, 案内チラシ「地域密着型インターンシップ研修」

13. 鳥の劇場の実験 (中島諒人)

☆事前調査隊～中島氏について発表「鳥の劇場主宰・中島諒人」(A3判1枚両面)。

○案内チラシ「鳥の演劇祭3」「第17回BeSeTo演劇祭鳥取」など

14. 総合討論会

○A3判1枚両面＝「レポートの書き方」(伊藤義之[2003]『はじめてのレポート』嵯峨野書院からの抜粋)

○案内チラシ「えんがわ事業実行委員会スタッフ募集」「第14回いんしゅう鹿野盆踊りについて」「森の健康診断in智頭」「楽園的絵画」など

15. 総括レクチャー

○各A4判1枚片面＝仲野「『地域学入門』ディスカッション・メモ」, 渡部「地域学とは『21世紀型の新しい教養』～ジェネラリストを目指そう!」, 光多「地域学について(補)」など

5. 新入生の変容—その1: 討論会の設定

(1) 中間討論会

全15回分の授業を録音保存しており, その記録に基づいて以下に概要を示す。第7回目(6月2日)に開催した中間討論会は, 統括担当者(渡部)が司会を務め, 学科世話人の4人(竹川・足立・茨木・鶴崎)が壇上の机に並んで受講生と相対する形で行った。

10:30～「映像で見る鳥取大学2009年版 鳥取大学は今NOW!」の地域学部の箇所を視聴(10分)

10:40～趣旨説明など

10:45～口火を切って各学科「2番」がまず発言(一人約1分)

10:50～学科世話人より第一巡目の発言(一人2分程度)

11:00～意見交換

昨年と同様に, 中間討論会では事前に発言者の指定を行った(各学科の学籍番号2, 12, 22, 32, 42, 52番の者)。欠席者を除くと指定者では地域政策学科5名, 地域教育学科4名, 地域文化学科[芸術文化コースを含む]4名, 地域環境学科4名が, 指定者以外には地域政策学科1名, 地域文化学科2名が発言し, 合計で20名(受講生の1割弱)であった。

- ・(渡部) 趣旨説明～今日は第1・2部の6回の講義を踏まえた中間討論。「意見をもつ, 発信する, 尋ねる, 挑む」などの方法で参加してほしい。特に, 「賛同, 反論, 補足, 深化, 発展」などのキャッチボールの楽しさを味わってほしい。今日の討論を踏まえて, 来週の冒頭で「39番」の人が感想・意見を述べる。
- ・(学科世話人) 自己紹介(省略)
- ・(渡部) 2010年度新入生アンケート結果の概要(省略)

1. 受講生から一巡目の発言(学籍番号2番の4名)

- ・(地域政策) 地域から問題を考えていくことが大切。しかし, 例えば北朝鮮のように国の力が強いところではどうなるのか疑問。

- ・(地域文化) 地域学とは広い視野で見る学問。将来どんな職に就き、どのように地域貢献できるか考えていきたい。
- ・(地域環境) 狭い範囲で地域を捉えていたが、様々な捉え方のあることが分かった。フィールドワークについて、地域環境学科では具体的にどのようなようであるか鶴崎先生に聞きたい。
- ・(芸術文化) 地域学は多くの人々の幸せを考える学問。「小さな幸せ」という考え方にも共感。芸術文化を通して地域の人と交流したい。

2. 学科世話人から一巡目の発言（主に第一レポートについて）

- ・(竹川) 苦言を呈することになるが、取り組み姿勢が少し甘い。レポートには4つの要求点があったはず。一つは、書式など形式的なもの。二つには、「鳥取大学が考える地域学」についてまとめること。三つには、3回の講義を踏まえて書くこと。最後に、文献を1冊以上読んで講義内容と結びつけて書くこと。まず、段落のないレポート（地域政策学科の4分の1にあたる15名）。これはレポート以前の作文の作法の問題。次に、他人の言葉を借りる時は「誰から」「何処から」借りたのかを示すこと。また、3回の講義の内容をしっかり受け止めてリアクションをしているものが少ない（中には満点のレポートもあったが）。光多・吉村・仲野先生に向き合って真剣に応答してほしい。
- ・(足立) レポートの中に気に入った言葉があったので紹介したい。一つは、これまでの教員養成だけの学部を「小さな学校」、それを越える教育をする学部・学科を「大きな学校」と述べていた。本質を捉えているのではないか。もう一つは、「コミュニケーション」。光多先生の「横申論」とは、色々な分野を浅く広く摘み食いすることではなく、自分とは違う人（分野が違う、年齢が違う、出身が違う、文化や言葉が違う）とどうコミュニケーションするかということではないか。これからが楽しみ。
- ・(渡部) フロアを見渡すとメモを取りながら聞いている人も居る。自分の意見をまとめる上で大切。さて、人を育てるには様々な方法があるが、「叱って育てる」「褒めて育てる」という手法が出た。地域文化学科はどういう手法で来るのか…。
- ・(茨木) 入学時の最初のレポートとしてはこんなもの。これから普通に4年間学んでいけば2万字から4万字の卒業論文が書けるようになるはず。さて、毎回の感想カードについて、地域連携・地域貢献について「失敗例はないのか」という質問があった。失敗例は山ほどある。しかし、分析や集積が難しい。これからやろうとしている人、やりたいなどと思っている人は、失敗に怖じけず、学生時代には失敗は当たり前と思ってやってほしい。
- ・(渡部) 「励まして育てる」「見守って育てる」という印象。
- ・(鶴崎) 竹川先生が言ったようなことはあるが、全体的には力を入れて書いている。地域環境学科には馴染みにくい内容の講義にも随分と刺激を受けた様子。フィールドワークについては、2年次に地域調査実習を1年間かけて行う。学科全員で動くことはできないで少人数に分かれる。3年生の前期までにまとめて、プレゼンテーションする。卒業研究は研究室が変わっても良い。
- ・(渡部) 補足すると、1年生前期に学部必修の「地域学入門」、2年生で各学科に分かれて「地域調査実習」、フィールドワークに出るのでお楽しみに。3年生前期には再び学部全体で集まって「地域学総説」、4年生でいよいよ卒業研究に取り組んで「学士（地域学）」の学位取得へ。

3. 質疑応答・意見交換 (学籍番号12, 22, 32, 42, 52番の指定者+その他)

- ・(地域政策) フィールドワークについて地域政策学科ではどのように?
 - ・(地域政策) 地域のことをグローバルに考える授業はあるのか?
 - ・(地域教育) 地域教育学科ではフィールドワークとか地域調査実習を具体的にどうするのか? 土井先生に質問。前回の講義で「地域に入っても地域を掻き混ぜることになったら意味がない」と言われたがどういうことか?
 - ・(地域政策) 地域連携活動への住民の反響・反応などをもっと知りたい。
- (竹川) 地域政策学科のフィールドワークは、今年度は岩美町が対象。まず地域の課題を学んで、興味を持ったテーマを掲げて、実際に地域に入って調べ物をする。年明けの2月に現地報告会を開く。住民に尋ねる、行政に聞きに行く等、方法は様々。対象の地域は変わる予定。次にグローバル関連の授業、地域政策学科の授業に「国際」という看板の授業は確かにないが、先生方は豊富な国際経験や情報をお持ち。興味があればどんどん尋ねてほしい。
- (土井) 先日の「手づくりまつり」は1,350人の参加、学生諸君にも活躍してもらった。質問について、かつてコンサルタントがどんどん地域に入った。しかし、地域にどういう要望があるのかを踏まえて、住民の視点に立ったものなのかが問われる。地域の中には引いている人、冷ややかに見る人もいる。「手づくりまつり」は14回目、20年30年続ける中で徐々に変わっていくもの。
- (渡部) 地域教育学科は、これまで2年生後期に「地域教育計画論」はあったが、地域調査実習はなかった。学生からの要望もあり、諸君が2年生になる来年度から地域調査実習が始まる。
- ・(地域環境) 地域学は地元の人と話すことが大切と思う。授業の中でそういう機会があるか?
 - ・(地域政策) 「儲けを前面に出さない」と言われたが、継続する為には「儲け」も必要では?
 - ・(地域教育) 私も「手づくりまつり」に参加。県民会館から商店街に会場を移したことで変わったことがあるか?
 - ・(地域文化) 失敗談や苦労したことを知りたい。
 - ・(地域文化) 方向性は変わるが、グローバルに考えるとしても結局地域で行動するしかないとすれば、グローバルとはどういう意味をもつのか?
 - ・(地域文化) センター試験後に受験を決めた人が多かったように、鳥取大学は全国唯一の地域学部であることがまだアピールできていないのでは。地域学のイメージがわかかなかったという受講生が多かった。先生方が地域学をめざしたきっかけを知りたい。
 - ・(地域文化) ホームページや資料から、地域文化学科では「因幡の白兎」など調べていることを知った。毎年続けている活動があれば知りたい。
- (土井) まず「儲け」の話は言われるとおり。次に、会館でやっていた時は終わっても建物の中には何も残らないので「砂漠に水を遣る」感じ。商店街でやると継続するし徐々に変わる。失敗談については、やることなすこと失敗だらけ。しかし、失敗をフォローしていくことが大切。
- (鶴崎) 地域の人との関わり方は分野やテーマで違う。地域環境学科でも例えばアンケート調査などの場合は人とかかわるが、野外でもっぱら動植物を相手にする場合もある。いずれにしても地域にはものすごく貢献していると思う。例えば、生物多様性や環境保護で取り組

まれていることに問題も多い。木を植えれば環境に良いという話ではない。それぞれの地域に固有の遺伝子があることを無視して、外から持ち込むことは止めてほしい。鳥取県の担当者には分かってもらっているが、一般にはまだ知られていない。

- （茨城）地域振興・地域貢献について、地域文化学科の地域調査実習が直接役立つというわけではないかもしれない。昨日は2年生と鹿野町の奥の方を、日本史の先生、国文学の先生と私で歩いてきた。1年間かけてフィールドワークのやり方など、分かってくれば良いと思っている。「グローバルと地域」については、世界の文化が鳥取と関係ないかと言えば、県立博物館で今開かれている企画でも分かるように、西欧から新しい遠近法の画法を取り入れた画家が鳥取藩でも活躍していた。世界が何らかの形で鳥取と結びついている。
- （仲野）面白すぎる議論が展開されていてワクワクしている。視点を変えて突っ込んでみたい（少し挑発することになるが）。フィールドワーク、グローバル・ローカル、成功・失敗の話にしても、随分と「二項対立」的な話しか出てこなくて気になる。確かに地域調査を設計して外に出かけていくが、自分は単に観察対象を調べるだけではない。それと同時に自分自身をも見つめているはず。自分はなんでしゃべれないのだろう、今までどんな訓練を受けてきたのだろう、という心の中のわだかまりなどを感じ、反省的な視点も生まれるはずである。そのようなことも含めてフィールドワークとは「生きているリアリティを観察すること」だと思う。また、スーパーや百円ショップに行ってもこの商品はどこから来ているのだろうか、映画や音楽も同様。グローバル・ローカルという二分法的な考え方がナンセンスで、ここに生きていることが実はグローバル。成功・失敗も単純な二項対立ではないはず。
- （吉村）グローバルやローカルに関連して、国家はまったく異なるもの。暴力を独占した組織が国家。地域のことを考えるときに、国家は絶対に視野に入れなければならない。そういう問題意識を欠かしてはいけないが、詳しく学ぶのは3年生になってから。
- （野田）「グローバルと言いながら、やっていることはローカルではないか」という質問。仲野先生も言ったように二項対立ではない。例えば、「北東アジア」も地域、住んでいる集落も地域。20世紀が「国家の時代」であったとすれば、21世紀は「地域の時代」。しかし、「地域」がバチッと決められている訳ではないので、悩みながら考えてほしい。もう一つ、「なんで地域振興をめざしたのですか」に関しては、地域振興をめざした訳ではない。「地域および地域学を創ろう」という旗を立てたのであって、地域振興をめざしているのではない（中には地域振興に繋がる場合もあるが）。
- （土井）地域の「生活」とはどういうことなのかをすごく考える。「因幡の手づくりまつり」も、「地域の活性化」などはおこがましくて掲げてはいない。自分たちができることは何なのか。
- （渡部）厳しい御批評も出たが、地域振興やグローバルについて質問した人が否定されているのではない。質問した人がいたからこそ、こうして議論が深まっていく。一人ひとりの発信がキャッチボールされ、コミュニケーションされ絡み合い、違う次元に上っていく面白さを感じてほしい。
- ・（地域教育）地域の人と一緒に活動したり子育てすることは大切。しかし、今の社会、隣の人に殺される事件も現にあって、どこまでを信用したらよいか。その辺をどう考えればよいか？
 - ・（地域教育）地域教育学科の足立先生に尋ねたい。大学を卒業して社会に出たときに地域学がどのように生きてくるのか？

- ・(地域環境) 地域学は人の幸せを考えられる学問。しかし、地域に生きているのは人だけではないはず。地域の中に生きている全てのものが平等に幸せになれるような活動は可能か？
- ・(地域環境) 鶴崎教授に質問。地域に仮に効果がなかった場合でも続けていくことで効果が現れるのを待つのか、それとも別のものに変えていくのか？
- ・(地域政策) 光多先生から地域学の歴史は教わったが、なんでこの鳥取に地域学があるのか？

4. 学科世話人からまとめの発言

- ・(鶴崎) 誤解がないように補えば全てが害になるわけでもない。やって効果があるかどうかを、個別にきちんと見極めていくこと。気になるのは、学生の間にあれこれ参加して時間を無くすこと。基本的に自分の専門をきちんと4年間勉強した上で貢献できることが沢山あるはず。
- ・(茨木) 1年生はまだ地域の人の話を聞く訓練は受けていない。人の話がきけるような訓練を積むことが必要。焦らずに4年間で学んでいってほしい。
- ・(足立) 地域学部で学んだ教員と教育学部などで学んだ教員が、どう違うのか。「学校の常識が世間の非常識」と言われた時代があった。地域学部や地域教育学科は「大きな学校」。中には教員にならない、教員と縁のない学生もいる。コミュニケーションをとるということは、こちらの言いたいことを言うと同時に相手の言うことをよく聞くこと。そういう中で育つことが「学校の常識が世間の非常識」と言われたいような教員が育つことにつながるのでは。もう一つ、「地域に信用できない人も居るのでは」という質問。附属学校には監視カメラが十台ほどある。正門には守衛さんが常時待機。「地域に開かれた学校」というが地域の人が自由に入れるかというところではない。日本社会全体のあり様ともかかわる大きな問題。学生のうちから考えることが大切。
- ・(竹川) 今日の発言のようなことをレポートに書いてくれればと、残念。私の専門は地域福祉。なぜ福祉にとって地域が大事なのか。人の幸せにとって地域の在り方が大きな影響を与える。とりわけ「生き辛さを感じている人」として地域が変われば180度違ってくることがある。「地域が危険」という話もあったが、「どうせなら地域を良くしていこうよ」「一番困難を抱えている人の視点から地域を考えていこう」ということ。今までは行政が福祉の主役だったが、地域の人達が自分たちで創れる福祉があることに気づいてきた。その時に「キーパーソン」が求められてくる。学問も実践も必要になってくる。地域福祉の授業も楽しみにしてほしい。
- ・(渡部) 時間の関係で光多先生の話は次週に。来週は、39番の学生と光多先生の話から始めたい。では、今日の素晴らしい討論会を拍手で締め括ろう。[会場から盛大な拍手]

(2) 総合討論会

総合討論会(7月21日)は、統括担当者(渡部)が司会を務め、学科世話人等の5人(竹川・足立・茨木・新倉[平井の代理]・鶴崎)が壇上に並んだ。学生の発言は、のべ15名であった。

1. 学科世話人等から一巡目の発言

- ・(竹川) 海士町への訪問希望者が27名。海士町も受け入れてくれることになり、今年も実施する。ついては来週終わった後に話し合い、実行委員会を発足させたい。さて、第2回目のレポートを読んで、随分と改善された。しかし、まだ4~5人は段落のない字の塊。今日、「レポートの書き方」に関する分かりやすい資料が配られている。伝えたいことをきちんと

伝えるには、レポートの書き方をしっかりマスターしてほしい。活字を読む習慣が弱くなっていると感じる。次に、参考図書を1冊以上読むことになっているが、文献の情報が講義の情報と上手くかみ合っていない（中には優れたレポートも何本かみられた）。一方、地域連携に関する講義を踏まえる点に関しては非常に良くできていた。ただ、もう一步踏み込みが甘い。「○○、□□の事例があった。面白そう。私も参加してみたい」で終わっている。何故面白いと感じたのかを記述したり、講師の活動への思いや思想・背景などへの考察があれば良かった。

- ・（足立）形式的な面は竹川先生と重複するので省いて内容面でのサジェスション。実践的な講義、特に土井先生への反応が大きかった。「ただ単にかじるのではなく食べきらないといけない」と書いていた人もいた。ただし、「地域に出る＝外に出る」という意識が強すぎないか。私なりに「地域学」を捉えてみたので紹介したい。真ん中に「考える＝Thinker」、それを囲むように「行動する＝Doer」「先導する＝Leader」「対話する＝Communicator」「調整する＝Coordinator」の4つが囲む「TDLCC」という5つの構成力になるのではないか。最初にあるのは個々の中にある地域を考えること。その上で、どこで活動するかによってDLCCが規定され、問われてくる。レポートが「外に出る」ばかりに向きすぎているので、「内なる地域」をもっと考えてほしい。
- ・（茨木）二人の先生に言いたいことを先に言われてしまったが、まず「文献を1冊以上読む」ことについて。文献名は確かに書いているが、「本当に読んだのかな？」という印象。まともにも本文の中に組み込めていたのは3分の1程度。新書を1冊読むのがまだ大変なのかも知れないが、少しずつ努力してほしい。まず読んで、その後で充分消化する時間を持たないとレポートにも書けない。本を読むというのは技術であり訓練が必要。二つめは、「レポートの書き方」。同じようなことは大学入門ゼミでもやったので、第3レポートに期待したい。三つめは、足立先生の整理で地域にかかわる色々な立場を改めて認識できた。講師の方々は一リーダーばかりなので、それ以外の立ち位置がうまく見いだせないのではないか。「地域のキーパーソンの養成」なんていうので「必ずリーダーになれ」と言ってるように聞こえるが、みんながリーダーになっては物事は進まない。少し手伝うということも大切。
- ・（新倉）平井先生の代わりに参加。附属芸術文化センターのパンフを配ったので、後で見えておいて。地域と連携しながら芸術の実践活動をしている。足立先生の「TDLCC」の模式図を借りて言うと、芸術はまず「Doer」でなければ意味がない。歌わないと歌にならないし、演じないと演劇にならない。そして「D」のために「TLCC」をやっているとも言える。さて、北川フラムさんと中島さんの講義しか参加していないが、中島さんの講義（お世話担当を務めた）への感想カードを全部読ませてもらったので、3つばかり話をしたい。一つは、「人は幸せになるために生きる」という言葉に反応。他人の幸せ・自分の幸せのために地域学は何ができるのか、考えようとしている感想が多かった。二つめは、「頭の中は世界で一番広い場所だ」とおっしゃった。芸術文化の仕事は頭の中を自由にする。つまり想像力（創造力）の問題。しかし、教育によって頭の中がどんどん追いつめられて狭くなっていく傾向にある。芸術によって枠を広げていく必要はないのか。三つめは、途中で板書を消した言葉、「日常はクソだ!」という言葉。もう少し皆さんの反発があるかと思った。「日常は大切なもの」「日常を積み重ねた上であるもの」という意見が多いかなと思っていたら、圧倒的に感動したという意見だった。芸術の役割は「疲れた人や絶望した人の心を癒したり」「皆を感動させたり」

もあるのだが、中島さんも北川さんも言っていたのは「炭坑のカナリヤ理論」というもの。「炭坑に入って空気が薄くなった時にカナリヤが一番に反応する」ように、世の中がかなり危険な状況になった時にそこに警鐘を鳴らす、まあ言えば世界にイエローカードを突きつけるというような役割。しかし、それは日常の言葉、日常の問題意識ではできない。日常の苦しみや課題を突き破るには、日常を越えたところで何かを言わないと抜けられないというようなことがある。日常をしっかり見つめないと逆に日常を越えられない。その辺をもう一度しっかり考えてみてほしい。

- ・(鶴崎) 大学入門ゼミで地域環境学科でもレポートの書き方を一度した。今日も資料が出ているので、最終レポートで是非活かしてほしい。第2レポートではまだ指示(例えば両面印刷、分量など)に従えてないものが幾つかあった。レポートではクライアントからの要求や指示に応える必要がある。また、「である調」と「ですます調」が混ざっている無神経なものもあった。パソコンで作業すると何度も書き直せるので、推敲して良いものに仕上げることができる。気持ちを込めて仕上げしてほしい。

2. 受講生から一巡目の発言 (学籍番号21番の4人をまず指名)

- ・(地域政策) 「暮らしやすい地域」について、地域をどうしたらいいのか、どうして行きたいのかがまだ分からない。竹川先生にお聞きしたい。
- ・(地域教育) 地域とは身の回りのことだけを指すのではないということで広く見ていこうとだけしていたが、足立先生が外ばかりみてもいけないと言われて、もっと柔軟な考え方をもちたい。そして実行できる人間になりたいと思った。
- ・(地域文化) 新倉先生の話聞いて、「日常はクソだ!」という言葉聞いて考えを改めた。「日常あつての非日常」ということで、どちらも欠けてはいけないと思えた。
- ・(地域環境) 地域政策などは地域連携にすごく繋がりがあるが、地域環境は自然などが対象なので、どうやって地域連携にかかわって行くのかがまだよく分からない。

3. 質疑応答・意見交換

- (渡部) 足立先生からは「外に向かうばかりでなく、内なる地域にも気づいてほしい」という指摘があった。地域連携がし易い学科とそうでないところがあるのではとか、「日常と非日常」という問題も出された。ここからは、指名なしで自由に行きたい。
- ・(地域政策) どこからどこまでが日常なのかよく分からなくなってしまった。日常はいつも同じということでもないだろうし、非日常と思っていたら日常になってしまったり…とか。
- ・(地域文化) 二つ質問がある。聞いていて、僕に何ができるのか、結局よく分からないなという感想。「地域学を4年間勉強してどのようなことが可能になるのか」よく見えてこなかったのだから、各先生にお聞きしたい。もう一つは、学生達がなんらかのアクションを起こしているとは思うのだが、その行為の結果がどの程度出ているのか。また、その評価を誰がどのようにするのか? また、日本経済、世界経済が全体として地域を疲弊させ、商店街が廃れ、鳥取から人が出て行く時に、街づくりは本当に必要なのか。個人や共同体が価値を持つべきだと言うことは分かるが、現実問題そうは行かないのでは。
- (竹川) 地域をどうしたらいいのか、街づくりは意味があるのかということについて。質問者は、自らの地元のことをレポートに書いている。地元をなんとかしたいという思いがあれ

ば、疑問をもつことはないのでは。その気持ちを大切にしていくこと。さて、「地域をどうしたいのか」を誰が決めるのか。研究者や学生が決めるわけではない。つきつめれば、住んでいる当事者。「そこに住んでいる住民が幸せになること」を目指すのだが、幸せは人によって、地域によって違っている。その異なってくる幸せを大切にすべき。今までのように国が決める、世界が（例えばアメリカが）決めるということではない。地域学は逆のベクトルであって、一人ひとりから始まってその地域に固有の幸せを見つけ出していき、そのための手伝いをするのが地域学ではないのか。キーパーソンとして係わる場合だったら、住民の思いを引き出していき、課題を発見し解決していくお手伝いをする。学生諸君は、自分の地元で当事者としてかかわっていくアプローチもできるし、地元でない場合もキーパーソンとして地域の幸せを実現していく手伝いもできる。そのために今学すべき事がいっぱいある。

→（新倉）茨木先生の領域なのだが、ブッシュマンの病気の治癒のダンスの話をする。その人たちには分からない得体の知れない悪霊が入り込んで、病気になると信じられている。シャーマンが踊りを踊って歌を歌いながら、媒介者になって、病気の霊を一旦自分のところに取り込んで、病気を治す。原初的に言うと、芸術や美術、踊りや歌も日常を越えたもの、つまり非日常的な力によって、日常的な自分の力ではどうにもならない不条理な問題の解決に挑む。悪霊が悪いのだから、悪霊に分かる言葉で伝えなければならない。日常の言葉では伝わらない精神的な課題がいつの時代にも存在する。中島さんも「僕は芸術家だから言うのだけど『日常はクソだ!』』」と言っている。日常の問題の中には合理的に解決できるものもあるが、頭や心の中には合理的に解決できない問題もある。そうした非合理の問題に届く言葉を探求するのが芸術の課題。最後に、自分に何ができるかを問うことは大切なこと。ただ、「教えてください」というのは、芸術の立場からは難しい。やってみて自分で見つけていくしかないのでは。

・（地域環境）新倉先生が「教育によって追いつめられて狭くなっていく」と話されたが、「教育も芸術と同じように頭の中を自由にしようと思われている」のでは？

→（新倉）教育も十分にそういう力をもっていると考える。しかし、北川さんは「リンゴという」と、『青い小さなリンゴ、赤い大きなリンゴ』をイメージする人が多い」と言っていたし、中島さんもある意味で教育の弊害としてどうしても画一的な答えになりやすいが、芸術の世界には一つの正答がある訳ではないと言っていた。一つの答えではないような問の立て方や考え方を小さい頃から大切にすれば、教育もまた自由な力を持つと思う。

→（足立）関連して、外ばかりに地域を求めると一辺倒では皆さんが困ってしまわないかと思う。例えば、寿司屋などに行くと「時価」という品がある。「時価」というのは、その時々によって値段が変わる。「地域」もある意味で捕まえどころのないものかも知れない。「どこが地域だろう」と追いかけすぎないで、学生である今は「自分の中にある地域や地域性」を育てていくという考え方もあるのではないか。

[話題転換]

→（渡部）第1部の講義を思い出して見ると、「地域学」でいう「地域」の設定は自由自在なものだった。空間的に居住地、自治体、国、世界のどこを切り取ることもできるし、共有する価値（ノーム）ということで同じ世代やある歴史的時代、さらにはインターネットの中の価値共有体を問題にすることもできる、また近所のスーパーの商品が世界のどこと繋がって

- いるかという捉え方もできた。「地域学」というアイテムを得て問題や対象を自由自在に切り取れるのだが、どう切るかにはやはり訓練がいるという話もあった。そこで、少し視点、論点を変えたい。外に出る訓練、新書を読む訓練などについても話が出た。地域環境は地域連携をイメージしにくいという質問もあったが、第3部でお話していただいた地域環境学科のお二人のスタッフは、ご自身の学問・研究が地域実践とどう切り結ぶのかという非常に分かりやすい話だった。4年間でどのような訓練を積んでいくのか、その辺りではいかがか？
- (茨木) 一般論として、何事をするにも技術が伴う。学生の皆さんも、自分が好きだからやってきたことには何らかの技術が身に付いているはず。地域に出て行くということにも技術が伴う。地域文化学科の皆さんと地域調査をやっているが、「大人と話ができる」「他人ときちり話ができる」も最初はまだできない。何回も失敗する中で、場数を踏んでみて、訓練していく。アンケートも色々な取り方があるが、はじめからまともなアンケートなど出来るわけがない。アンケートの調査法の本だけでも何冊も出ている。というふうに、やるべきことは沢山ある。
- (鶴崎) 地域環境学科は確にかかわり方が少し違うかも知れない。地域連携は地域学部としては大事なものだが、学生の間はあまり引きずられない方がよいのでは。アルバイトやボランティアも良いのだが、自分が本当に究める事を見つけて、時間を使うことも大切。自分が得意な分野、好きだと思える課題で、自分にしかできない事を養う時間を置くこと。愛媛県にはクモをやっている人が居なくて、私は中学生の時から「クモ」の研究を始めた。それが30年後にも活きている。
- (渡部) この地域学入門の後、皆さんは3年半これから学んでいく。どんな力をつけたいのか、こんな授業がほしい、授業をこんなふうに改善してほしいと言った要望も含めていかが？
- ・ (地域政策) 大学で座って学ぶというのではなく、フィールドに出て学ぶことが大事だし、面白いし、本当のことが分かって来るのでは。地域調査実習に期待している。
 - ・ (地域教育) 2年生になったら小学校で教えること、特に算数についてやってみたい。必修の「日本国憲法」とか、将来これが本当に使えるのかと思う授業が多くて…。実践的なものに期待している。
 - ・ (地域環境) 私も実習に期待している。高校生の時に「文系」だったので、地域環境に入って物理とか化学とかが訳分らない感じ、でも頑張っている。なんとか地域に貢献できるようにしていきたい。環境ということに囚われすぎずに考えていきたい。
 - ・ (地域教育) 地域学部というと実際に各地に出て行って活動することが1年次から結構できるのではないかと思って入学したが、そうではない。南部町に今度出かけるが、そうした機会をもっと増やしてほしい。
 - ・ (地域政策) 地域学を学ぶ上で「学際的な考え方」が必要だと言われたが、他学科もかかわっていけるようなフィールドワークがほしい。
 - ・ (地域文化) 1年次の学生が3年次の科目を履修することはできるのか。例えば、アートマネジメントに今興味をもっているとしたら、最も関心がある時に履修できるようになると良いのでは？
 - ・ (地域環境) 実習することでデータを取ると思うが、地域に公表し、役に立っているのか？
 - ・ (地域政策) 農山村を元気にするには、グリーンツーリズムとか観光が主力の産業になると思うが、そうした授業を設けてもらえないか？

4. 学科世話人等からまとめの発言

- ・(竹川) 地域政策の地域調査実習は毎年、現地発表会を行っているが、参加者が増えている。これだけでも期待されているということ。地域連携や地域にかかわって行くことの危うさについて書いているレポートがあった。一つは「学生が粗相をしないか」、もう一つは「主体的にかかわるのではなく学生が動員されているのではないか」というもの。前者の方は、思いっきり地域に出て、一生懸命やってかけた迷惑は、教員が責任をとる。問題は、いやいや行って取り返しをつかない失敗をしてしまうこと。皆さんに、十分に目的意識を持っているかということを知りたい。偏差値で鳥取大学の地域学部に来たという人もいるかも知れないが、それでは幸せになれない。偏差値はたまたま一つの価値基準。人を幸せにする価値基準は世の中にいっぱいある。それを自分自身で獲得するというのが大学4年間。地域学が何を目指しているのかというと、私は「自治自律（自立）」と考えている。自分自身を「自治自律」することが、地域や社会の「自治自律」になる。国や既存の価値観に依存しない地域社会の在り方、個人の生き方を探っているのが地域学ではないか。
- ・(足立) 地域教育学科でいうと附属校で教育実習があるが、一番困るのがやる気のない実習生。小学校の実践的な勉強、大いに結構。しかし、子ども達が40人くらい居る教室で「意思の疎通」ができてなければ、算数を教えても付いてこない。異年齢の人たちとうまくコミュニケーションをとること（例えば南部町に出かけて行って話を聞く、尋ねてみる等）もしっかり勉強した上で、教える技術、専門的なことも身に付けていってはどうか。
- ・(茨木) 皆さん自身は気がつかないかも知れないが、1年次は1年生向きに、3年次は3年生向きに作ってある。3年後期の授業に1年後期で出て、それで良いというものではない(聴きたければ聴講はできたとしても)。在学中に成長を遂げていく。次に、「街づくりは本当に必要なのか」について。「必要ない」と否定するにはそれなりの準備と根拠が必要。やはり4年間ないしそれ以上の訓練があってはじめて否定できることではないか。
- ・(新倉) ピンチヒッターで参加できて、もう少し時間があればというほど楽しかった。「地域とは身の回りのことだけではない」と言ったことに対して一言。鳥取とドイツのハーナウ(グリムの生誕地)またはブレーメンとの交換演奏会をしようということになって、鳥取を題材とした音楽物語を作曲してもって行こうかという時に、鳥取のことはもちろん先方の歴史や文化も調査して学び直す必要を感じている。つまり、どこであって活動する場面が地域になってくるのでは。
- ・(鶴崎) 地域調査実習の成果はもちろん公表されている。鳥取に学会なども色々あるのでどんどん参加してほしい(私も中学校の時から「蜘蛛学会」に入っている)。そういう場所で情報を得たり、発表することで繋がっていく。
- ・(渡部) 意見が出始めたところで時間切れになってしまった。新しい科目の開設や授業への期待は今後の改善にも活かしたい。さて、来週は、最終レポートの提出と総括レクチャー。楽しみにしている。それでは終了。[盛大な拍手]

(以上、文責・渡部昭男)

6. 新入生の変容—その2：学科別にみた変容

4学科1コースのうちから、3学科についてのまとめを収録する。

(1) 地域政策学科

先に見た様々なデータが示すように、本年度の地域政策学科の59名の新入生については、昨年と比べて本学科で学びたいと積極的に志望した者が約1割減少し、センター試験後に入試の難易度を見て志望を決めたという消極派が増加していることから、大学生としての自覚や目的意識、学ぶ意欲といった点で懸念が生じてしまうが、このような不安に関しては、実際に講義開始となってから折に触れて感じられる部分があった。特に昨年度の新入生は、全体的に受講態度も積極的で、その勢いが2泊3日の海士町訪問研修を実現させるという逸話を生み出したほどであり、ともすると厳しい目で今年度の新入生を見がちになる。しかし、それを割り引いて評価したとしても、やはり今年度の学生たちには不満を感じざるを得ないポイントが散見された。以下、その具体的な内容と、講義が進むにつれて次第に生じてきた学生たちの変容について述べたいと思う。

昨年度と比較して今年度の新入生にみられた不満点は、①出席状況、②予習事項の発表内容、③出席カードへの記入内容、④レポート内容(全3回のうち特に初回と2回目)の4点である。①の出席状況を振り返ると、まず全出席の学生の割合は、昨年度が54名中43名の80%だったのに対して本年度は59名中39名の66%に留まった。欠席回数についても、昨年度は2回以上欠席者が0名だったのに対し今年度は7名(うち4回以上で落第3名)という残念な結果であった。次に②の予習事項の発表に関しては、昨年度はほとんどの学生が事前準備を済ませてしっかりとした内容の発表をしたことに感心したが、今年度は自分が予習事項を発表することになっている回の講義を欠席してしまう学生が続出したほか、発表をしても講義の予習ではなく単に自身のプロフィールを紹介するパターンが多いなど、新入生の無責任な取り組み姿勢が目立っていた。

さらに文章表現力にも昨年度との違いが認められた。③出席カードについては、毎回講義に関する感想や質問事項の記入が求められる。あくまで昨年の印象であるが、今年度は時間配分が特に少なかったという訳ではないのに、全体的に記入量が少ないものも多く、内容に関しても表現力の乏しいカードが目についた。そして④レポートであるが、上記5(1)の中間討論会での筆者の発言にあるように、第1回目のレポートについては、新入生の4分の1にあたる15名が段落のないレポートを提出するなど、内容以前の問題で躓く学生が多く、また、与えられた課題を無視して講義内容に触れずにただ自分の印象を述べて終わるものが少なくなかったために、中間討論の場で敢えて苦言を呈さずにはいられなかった。第2回目のレポートでは、さすがに段落のないレポートは5件まで減り、授業内容についてもそれなりにまとめられるように成長していたが、各回の講義に共通する地域学のエッセンスの抽出や課題図書と講義内容を結びつけた考察など、教員サイドが期待するような水準に達しているレポートは稀であった。

以上のように、今年度の新入生については、昨年度と比べて不満を感じる部分が多く、正直なところ講義開始から中盤にかけての頃は、チーフを務める渡部教授と顔を合わせては不安な印象を語り合っていた。しかしながら、講義が6月2日の中間討論会を過ぎて第3部「地域づくりの実践」に差し掛かったころより、学生たちの反応に変化が現れるようになっていった。上記①から④で言えば、②～④で大きな変化が見られたのである。以下、その具体的な内容を述べるとともに、変化の要因についても分析を加えてみたい。

まず②の予習事項の発表に関しては、6月23日の山内道雄海士町長の講義の回より状況が一変し、当番の学生たちが事前にレジュメを作成・配布して、それに従って発表するようになっただけであ

る。この変化の裏側には、予習事項の発表の粗末さを憂慮した筆者が、6月23日の当番になっていた本学科の学生たちに山内氏の著書を読むように指示したほか、調べるべきウェブサイトについてもヒントを与え、そのうえでレジメを作成することをアドバイスしたことが功を奏していた。結果としてこの回の出席カードには、多くの学生たちから「レジメがあるので分かりやすい」、「よく調べられていた」といった好意的な感想が寄せられていた。そしてこのような学生たちの反応は以降の予習事項の発表に反映され、これ以降、レジメを用いた発表を行うか、そうでなくても一定以上の準備を踏まえた発表をするように変化し、そのクオリティが飛躍的に高まったのである。

次に③の出席カードへのリアクションであるが、これについては5月26日の土井教授による「ものづくり道場」、「因幡の手づくりまつり」の紹介や、6月16日の北川フラム氏によるアートによる地域づくり実践の紹介の辺りから鋭い反応が返るようになったという印象がある。特に6月以降の第3部は、いずれの回も第一線で活躍している著名人からの講演や、鳥取砂丘などの日頃ほとんど目や耳にしないような話で、どの回もインパクトの強い内容だったこともあり、基礎理論から地域連携へと徐々に広がってきた「地域学」のイメージを、さらに具体化して理解する手助けになったと感じられる。また、6月23日の山内町長や同月30日の南部町のコミュニティスクールに関する杉本氏の講義の後には、希望する学生・教員と講師との直接の意見交換会の場が追加で用意されていたが、これにも多くの学生が積極的に参加することで、学びへの意欲を高める機会になったと思われる。そして中でも最も反応が鋭かったと思えるのは7月21日の総合討論会であった。中間討論会においても教員とコミュニケーションすることや他の学生の意見を聞くことの意義・楽しさを感じ取る学生が少なくなかったが、総合討論会では学生からの意見・質問もより積極的に示されるようになり、そうした姿勢は当日の出席カードにも、「自分も意見を言いたかった」「こういう機会を是非増やしてほしい」といった主体的な要望として数多く現れていた。

最後に④のレポートであるが、中間討論会に続けて7月21日の総合討論会においても、第2回レポートの物足りない内容を見た筆者は、その内容に対する苦言を呈し、レポートのまとめ方に関する多少のアドバイスを行った。結果として第3回レポートに関しては、提出されたレポートのほぼすべてにおいて筆者の指摘を踏まえた構成ができており、各回の講義のポイントの整理に加えて、課題図書の内容を絡めた独自の考察に挑戦しようとするものも多く、第1回目に多発した段落のない我田引水のレポートと比べると、飛躍的な水準向上が認められるようになった。そして、こうした学生の変容は最終的に2回目の海士町訪問研修の実施へと結実する。詳しくは下記8にて論じるが、6月23日の山内町長の講義を受けて、今年は昨年を上回る27名の学生から「是非海士町に行きたい」という申し出が寄せられ、調整の結果17名の学生と5名の教員が9月6～8日の2泊3日で隠岐の島海士町への訪問を果たしたのであった。

当初の心配とは裏腹に、終わってみれば今年度の新入生にも彼らなりの変化と成長があり、その一部は海士町や南部町への訪問研修という経験を経てさらに地域学への興味・関心を深めたものと思われる。しかし、予習事項の発表やレポートの書き方など、やはり昨年度とは違ってその変化と成長に際してチーフの渡部教授をはじめ学科の世話役教員が果たした役割が大きかったのも事実である。それなりに手をかけて指導すれば素直に響く学生たちだという評価も当てはまるであろうが、裏返せばそれだけ受動的な学生が多かったということでもある。海士町や南部町への訪問の機会を捉えて大きく変化・成長した学生についてはよしとしても、早々とドロップアウトしてしまった学生を筆頭に、新入生たちには、「地域学」を学ぶことに興味・関心をもちえずに、いまだ大学生としての自覚や目的意識が不十分なままの学生も相当数存在する。わが国で「格差社会」という言葉

が使われだして久しいが、本学部の新入生の中にも、以上のような「学びへの格差」が拡大しているのではないかという疑問を改めて感じさせられた半年でもあった。

(文責・竹川俊夫)

(2) 地域教育学科

地域学入門では、毎回の授業に対する感想に加えて、3回のレポートが課された。第1回目のレポートは、『「地域学」とは何か』の講義を3回聞いた後、2回目は「鳥取大学の地域連携活動」に関する事例を3回聞いた後、そして最後は、『「地域づくり」の実践』を6回にわたって聞いた後である。

最初のレポートでは、学生の多くが抱いていた素朴な地域(学)観が専門的、理論的な見方にとって代わられる様子が随所にうかがわれた。

高等学校から大学に入学したばかりの新入生に、「地域学」の正確なイメージを要求することは無理であろう。たいていの学生はレポートの冒頭で、地域学の「地域」とは「鳥取周辺の地域」で、その「学」の中身は、「地域のしきたりに触れたり、伝統や食べるもの、音楽などを通して交流」していくことであると思っていたと述べている。レポートはそこから講義で聞いた内容が中心となり、総合的・横断的の学問であるとか、ノーム、伸び縮みする空間といった、講義で出てきた用語が使われるようになります。ここには、素朴な地域観が崩れ、新たなイメージを再構築しようと各自がもがいている様子が良く現れている。中には、講義で聞いたことを受け売りで繰り返しているだけ、というレポートも見受けられる。一方で、参考文献をうまく利用し、「講義の内容プラスα」といった評価に値するレポートもある。特にその中でも、従来の教育を「小さな学校」、地域教育を「(地域全体の中で行う)大きな学校」と分類したレポートなどは、地域教育の本質を理解しやすい言葉で表しており、学生の独自工夫が見られる。

2番目のレポートは、3回にわたる「鳥取大学の地域連携活動」のテーマによる講義を受講してから課されたものである。

この講義では、現役の大学院生(鳥取大学地域学部卒業)の経験談などもあったせいか、受講生にとってはとりわけ身近に感じられたようである。現代の大学の役割が、単なる学問研究にとどまるだけではなく、その成果をアウトリーチ(地域貢献)という形で地域に還元することにあると再認識した学生も多かったようである。また、鳥取大学のモットーである「知と実践の融合」に言及したものもいた。その中でもとりわけ、土井教授の行った「因幡の手づくりまつり」には実際にボランティアとして参加した学生もかなりの数にのぼり、このような活動こそ入学前から考えていた地域学であると納得しているレポートもあった。と同時に、講義で学んだ「継続性」の重要性を改めて考えさせられたという論調も多く見られた。どのようなタイプのアウトリーチであれ、それが一過性であったり、あるいは自己満足で終わるようなものであってはならないということに対する認識の現れであろう。レポートの中には、今回のテーマでは扱われず、第3部に予定されていた教育分野でのアウトリーチに触れているものもあった。内容はさまざまであるが、大学の地域連携活動が教育面ではどのように活かされるのかを参考文献やインターネットを使って調べていた。このような方向は、いかにも地域教育学科の学生にふさわしいものであると評価できる。

第3部は、地域学部の教員を含め、実際に地域の各分野でリーダーとして活躍しておられる方々を招いての講義であった。芸術祭総合ディレクター、鳥根県隠岐海士町町長、鳥取県南部長教育委員会主事、鳥の劇場主宰者といった、第一線で活躍しておられるリーダーたちである。地域教育学

科の学生たちも、それぞれの講師の話に大きくゆさぶられた様子がレポートに現れている。特に、南部町のコミュニティスクールの実践は、まさに地域と教育が一体化した好例であったせいか、多くの地域教育学科の学生が関心を寄せていた。

これら外部講師の方々は皆、スケールが大きく、また斬新なアイデアや行動力にあふれる人材ばかりだった。そのせいかレポートの中には、地域学部で学ぶことでこのような人たちと肩を並べるような人材となることが期待されているかのような、一種のプレッシャーを感じるという内容もあった。そこで、自分の能力、適応性と期待の高さのギャップを埋めようとして、何人かの学生は2回目の討論会で紹介した5つのキーワードを利用して、討論会で紹介した5つのキーワードとは、THINKER, DOER, LEADER, COMMUNICATOR, COORDINATOR³である。また討論会では、自分を取り巻く外の世界としての地域ばかりではなく、この5つのキーワードが形成する自分の中の内なる地域、地域性にも着目する必要があることを述べた。学生たちはこのような情報を使い、自分にとってふさわしい役割とは何なのか、また学生時代にこの学部で何を学ぶべきか、さらにどのような能力を身につける必要があるのかといった点にも触れていた。このような様子も、地域学入門で学生が変化を示しだした兆候として受け止めることができよう。こうして大学生として出発をきった地域教育学科の学生諸君が、今後4年間でどのように成長していくかを担任として見守っていききたい。

今回「地域学入門」に担任が参加させていただいたおかげで、自分が所属する学科の学生諸君の様子を1年前期からつぶさに観察することができた。この点、「地域学入門」への担任の参加は非常に良いシステムだと感じた

（文責・足立和美）

（3）地域環境学科

地域環境学科では1年生49名（女子25名、男子24名）（他に前年休学から復学した2年生1名、3年次編入留学生1名の総計51名）が受講した。1年生については1名で欠席がめだったほかは、全出席が35名（71%）、欠席1回が8名（16%）、2回が5名（10%）と出席状況については申し分なかった。

第1回のレポートは、最初の3回の講義をベースに、「地域学」について簡潔に説明することが課題であった。提出された50人のレポートのうち、20人のそれに「これまで自分がもっていた『地域学』に対するイメージがすっかり変わった」とか、「これまで自分が考えていたよりも奥深いものであることに気づかされた」、などといった記述がみられ、各自が理解した（らしい）地域学の定義と説明が試みられていた。「理解した（らしい）」と書いたのは、当人が本当に理解して書いたかどうかはやや怪しいからである。第1部の話は概して抽象度が高く、傍聴していた筆者にも正直なところ難解だった。受講生が同様に感じていたことは毎回講義の最後に提出することになっている出席カードの「感想・意見・質問」欄には、「難しかった」「○○のところがよくわからなかった」といった感想・質問が目立っていたことでも窺われた。しかし、課題のレポートの中では「よくわからなかった」で済ませるわけにはゆかない。そこで一生懸命取り繕って仕上げたという印象を、

³ この5つのキーワードのうち、THINKER, DOER, LEADERは、リサーチ・チャンネルのThe University of Washingtonのホームページで使われていた表現である。<http://www.researchchannel>. 参照。

この第1回のレポートからは受けた。ただし、与えられた課題をより満足させるように、記述を取り繕うことは大切であり、新入生の多くがそのしたたかさを備えていることに安堵した。

第2回のレポートは「第2部の第4～6回の講義で提示された『地域連携活動』をまず整理したうえで。鳥取大学の地域連携活動への期待や自らの関与について述べる」という課題であった。提出期限が、「鳥取砂丘の自然を読み解く」と題して筆者が担当した講義（第8回）よりもあとであったためか、地域連携活動のまとめの中に筆者の講義も含めているものが若干見られた。また自らの関与については各自の出身地で自分が経験した活動（なかには地域環境学科に関連の深い内容のものも見られた）を紹介しているものが比較的めだつた。

第3回レポートは、「どのような『地域づくり』に取り組んでみたい（または在学中に学習・研究してみたい）かを『地域学』の可能性と重ねて述べよ」が課題であった。提出された47レポート中、課題に適切に応えていない4編をのぞく43編の中では、取り組みや学習への意欲は語られているが具体的な内容を示さなかったものが30と最も多かつた。取り組みたい課題について具体的な内容が挙げられたレポートの中ではその課題は多い順に（以下、括弧内は人数）、観光・地域ブランド（3）、環境についての知識を活かした町づくり・地域づくり（2）、自然再生（2）、環境問題（2）、地域資源（2）、森林再生（2）、博物館・自然インストラクター（2）、ゴミ問題解決（1）、砂丘の自然環境調査（1）、であった。新入生の7割が取り組みたい課題を具体的に明示しなかったのはやや残念な気がするが、入学してまだ半年を経ない段階での問いであるので無理のないことであろう。総合討論会などの機会に、地域連携活動に無闇に首をつっこむ前に、在学中はまずは基礎的教養と専門的な知識とスキルを涵養することを求めたことも、関わりたい地域づくりを具体的に示すことなく地域環境に関する基礎的知識の習得を目標として掲げるという行動を促進したかもしれない。

筆者は2008年度の本講義で「鳥取の自然と風土」という演題で1回だけ話題提供をおこなったが、全体をとおして聴講したのは今回が初めてであった。演者も内容も多様なこの講義は毎回楽しめた。抽象度が高く内容がやや難解と感じられた第1部に続き、第2部でも地域環境学科が学科または教員単位で取り組んでいる地域学関連の話題はなかったので、地域環境学科の学生には若干フラストレーションが蓄積することもあったかもしれない。しかし、後半での地域環境学科教員2名の話題提供や第2部以降で紹介されたさまざまな地域おこし・地域関連の話題で、地域学としての取り組みには多様な立場があり内容も多様であることが受講生にも認識されたようで、その安堵感は後半のレポートにも読み取ることができた。本講義が標榜する参加型・ゆさぶり型授業展開という企図（渡部ら 2009）に照らして、第1部の講義はやや難解ではあっても最初に「ゆさぶり」を与えるという点でうまく機能していたと感じられた。

なお、レポートの書き方については、本講義の中間討論会で学科担当教員からいくらかコメントする機会があったことや、「大学入門ゼミ」でも途中で若干の指導があったこともあって全体的に幾らかは向上した。ただ学級担任として本講義へ参加した筆者は、もともと前期の担当授業が混んでいるところへ、本年は「大学入門ゼミ」も担当したこともあって業務が完全にオーバー・フローし、コメントを加えたレポートを受講生にすばやく返却することで個別に添削指導するというところまで踏み込めなかったのが反省点である。個々のレポートの文章量を3課題ともA4判片側1ページまでに制限する（今回は、第1回レポートのみ1ページ、残りは両面印刷で2ページだった）などの方策も検討していただければ、この目標に近づきやすくなるかもしれない。

（文責・鶴崎展巨）

7. 新入生の変容—その3：南部町訪問研修の実施

(1) 訪問研修の概要

日	時：2010年8月27日（金）日帰り実施
8:00	大学集合・貸し切りバスにて出発
10:30	会見小学校着 午前～6年生とGTA（祖父母による学校支援組織，PTAの祖父母版）有志とによる「蕎麦の種まき活動」に参加 お昼～学校給食に参加 午後～コミュニティスクールに関する懇談会
15:00	南部町内の視察
15:30	現地出発
18:00	大学到着・解散
場	所：南部町立会見小学校（及び南部町内）
引	率者：地域教育学科：渡部昭男，南部町派遣職員：亀尾憲司，内地研修員：井崎典子 参加学生：地域政策学科1名（1年），地域教育学科9名（1年4名，2年1名，3年4名），地域文化学科2名（1年）の計12名
目	的：南部町教育委員会の杉本由香里氏の「コミュニティスクールの取り組み」と題した特別講義に触発されて，是非とも実地見学をして学びたいという受講生の主体的な活動を支援する目的で計画した。具体的には，視察を通じて特に「地域と学校」「地域と教育」との関連を深めることを狙った。
交通手段	：貸し切りバス～地域学研究会幹事会にて承認をいただき必要経費を確保。
備	考：当日までの経過 6/30～杉本氏の特別講義。終了後に囲む会（約15名参加）。 7/8～地域学研究会幹事会で南部町&海士町への訪問調査の企画を内諾。 7/20～1年生を中心に参加希望者を募集（学生12名+付添3名を確定） 7/26～訪問団の結団式（昼休み） 8/26～前日会議を開催（事前調査の発表、保険への加入など）

(2) 事前の準備・質問

参加者は，杉本氏が配布した特別講義の資料に加えて，岸本隆治「コミュニティスクールにおける新しい学校運営の考察～学校運営協議会の役割と課題～」(『鳥取大学大学院教育学研究科修士論文抄録集 2006年度』2007年3月)及び京正裕之「住民1000人と『地域協働学校』／鳥取県南部町立会見小学校／第25回時事通信社『教育奨励賞』推薦校の実践」(内外教育，2009年8月21日付け)を全員が事前に学習した。その上で，各自が設けた事前質問は以下の通りである。

- ・(地域政策1年) ①導入する際の地域住民の反応。／②もし反対した人がいたらどのように納得させたのか。／③コミュニティスクールでない学校の生徒との学力の差などは無いのか。
- ・(地域教育1年) ①最初にコミュニティスクールについての講義を聞いた時にこんなに素晴らしい制度があるのか，という衝撃を受けたのですがそれと同時にコミュニティスクールを導入している学校ならではの問題（保護者や地域の人たちの完全な支持の欠如など）についてどのように改善を目指しているのかについて知りたいです。また他の問題があれば，それ

についても知りたいです。／②コミュニティスクールを導入するにあたって学校運営協議会の権限などからその学校の教員に対しての負担は通常の学校の教員よりも大きいものになると思うのですが、それに関してコミュニティスクールを導入している学校の教員に対して具体的なフォローはあるのでしょうか？

- ・(同上) ①コミュニティスクールとして何か新しい事を始めようとする時に、それに反対する人がいた場合は、多数決で多い方の意見を通すのか、それとも反対派の意見を取り入れるのか質問したいです。／②上の質問も踏まえて、コミュニティスクールを地域全体が協力してうまくやっていくことに何かコツや、大切にしていることは何かも質問したいです。
- ・(同上) ①都会では通学地区がばらばらで学校と地域とが一体になりにくい状況があるが、その上でどのように地域と学校が連携していけるか。／②同じ鳥取県内でコミュニティスクールをどのようにしたら広めていけるか。
- ・(同上) ①コミュニティスクールの方式を継続する上で何か取り組んでいることはありますか。／②市町村合併等の動きの中、子供たちに配慮された学校経営を何か試みましたか。
- ・(地域文化1年) ①学校運営協議会について、地域の方々が参加しやすいような工夫にはどんなものがあるのか。／②南部町の給食は民間委託だとあったが、民間委託にして良かったこと・苦労していること。
- ・(同上) ①コミュニティスクールの実際の流れ。／②南部町の今後の課題。
- ・(地域教育2年) ①コミュニティスクールを経て卒業した生徒の進路に変化はあったのか。／②コミュニティスクールを地域に広げる方法について。
- ・(地域教育3年) ①コミュニティスクールの取り組みは、子どもたちや地域のようにどのように影響を与えているか。／②「全国学校給食甲子園大会」というのはどのようなものか。
- ・(同上) ①あいみ学校応援団の6つの活動部はそれぞれ活動されていると思いますが、その6つはどのように繋がっているのですか？もしくは、全く繋がっていないのですか？／②南部町以外のところでコミュニティスクールをうまく機能させるためには、どのような工夫が必要だと思われますか？
- ・(同上) とにかく現地を訪ねて「コミュニティスクール」の実際を見て参加して体感したい。
- ・(同上) ①南部町の子育てサークルでかきっこクラブやにじいろポケット、ふたごの家族の会ぐりとぐらをホームページで拝見しましたが学生は参加していないんですか？／②第3回全国学校給食甲子園大会で入選されたメニューで、あごのカレー揚げとはなんですか？

(3) 研修の成果と今後の予定



午前中の「蕎麦の種まき活動」は、6年生の児童約40名とGTA有志の祖父母と一緒に秋蕎麦の種をまき、2か月後には成長した蕎麦を収穫して、手打ち蕎麦を楽しもうという趣旨である。バスが予定より遅れて到着し、小学校の玄関

で待ちかねた6年生児童と対面式を行った。その後、作業が出来るように準備をして、児童と共に学校から徒歩15分程度の畑まで歩いた。GTA有志から蕎麦の種まきについて説明があった(写

真左）後に、学生も加わって種をまいた（写真右）。夏休み明けとはいえ例年のない猛暑で熱中症を心配したが、無事に作業を終え、農家の方々をご用意下さった冷えたスイカを美味しくいただいた。

午前中に児童と親しくなった学生達は、給食を共にする中で、さらに交流を深めた。その関係は、昼休憩の遊び活動や校内探検へと広がっていった。また、食育に関心をもつ参加者は、子ども達に案内されて、学校敷地内に併設する給食センターにも出かけていた。



午後の懇談会には、会見小学校の森谷哲郎校長、秋田哲教頭、三上恵子教諭（地域協働学校担当）、南部町教育委員会の杉本氏に加えて、会見小学校地域協働学校（コミュニティスクール）運営協議会の岡田昌孫会長・永栄英夫

副会長（兼GTA部長）もご参加下さった。南部町教育委員会『ふるさと学習副読本』（小学校中学年用、同高学年用／ともに2010年3月発行）の2冊と、会見小学校地域協働学校運営協議会「地域のよさを学校教育に生かし、地域と共に歩む『開かれた学校』づくり」のリーフレットが全員にプレゼントされ、まず会見小学校及び地域協働学校のあゆみと概要が説明された（写真左）。その後、岡田会長、永栄副会長、三上教諭、杉本主事の各々を囲む小グループに分かれて、自由な質疑応答の時間とした（写真右）。わずか1時間半という懇談会ではあったが、小学校及び地域協働学校の関係者の話を直接うかがい、学生も自らの質問を臆することなくぶつけて、稔りの多い時間となった。

今回の南部町訪問研修には、地域環境学科を除く3学科（地域政策・地域教育・地域文化）から参加があった。また、「地域学入門」の過年度の受講生であった2・3年生もメンバーに加わった。杉本氏には2007年度より4年間連続で特別講師を務めていただいております。現地訪問によりコミュニティスクールの雰囲気を感じ、実際を確認してみたいという気持ちを温め続けてきた上級生達である。異なる学科や学年が混じり合うことで、新たな刺激や交流も生まれた。

9月末には「報告冊子」を作成し、さらに都合が合えば「蕎麦の収穫活動」または「手打ち蕎麦づくり」に再訪問の予定である（11月）。南部町は鳥取大学から車で約2時間半の距離にあるが、受講生の熱意によって、特別講師を招く交流から直接訪問する交流へと貴重な一歩が踏み出せた。これまでも幾人かの大学スタッフや地域政策学科の地域調査実習グループが訪ねたことはあったが、「地域学入門」という科目の一環として相互交流を継続させることによって、附属学校園との関係に限定しない、地域の行政機関や住民、地域の学校からも学ぶことのできる、まさに「大きな学校」としての地域学部の在り方に相応しい姿が新入学の一年生段階から提供できよう。

（文責・渡部昭男）

8. 新入生の変容—その4：海士町訪問研修の実施

（1）訪問研修実施までの経緯

昨年度に続き本年度も隠岐郡海士町への2泊3日の訪問研修が実施された。昨年は渡部チーフの挑発発言を端緒として学生たちの海士町への思いが募り、思わぬ形で実現されたこの企画であるが、本年度に関しても訪問を実施するかどうかは、6月23日の海士町長山内氏による講義への学生たちの反応に委ねられていた。地域学入門を学んだ学生たちが主体的にこの研修の企画を希望し、自分

たちの力で教員を動かして実現したという形式を大切にされたからである。

そこで山内町長の講義の際、昨年の訪問グループを代表して現在2年生の中村千尋（地域政策学科）から、昨年の訪問研修の様子とその体験が自分自身にどのようなインパクトを与えたについて話しをもらった。こうして訪問の大まかなイメージを伝えた後、6月30日の講義終了後に、海士町及び南部町への訪問希望者がどの程度いるかを探るために簡単なアンケートを実施した。この結果、期待以上の30名近い学生から海士町訪問を希望する声があることが分かり、後日改めて正式な参加申込書を提出させたところ27名の学生から意思表示があった。以上のような学生の反応を受けて7月に地域学研究会幹事会と海士町側から了解を取り付け、本年度も正式に海士町訪問研修を実施する運びとなった。

参加者数が11名だった昨年度に対して、本年度は27名が参加の意思表示をしたこともあり、まずは実行委員会を組織することとし、7月28日の最終講義終了後に参加希望者を教室に残して委員の選出ならびに実行委員会・事前学習会の日程調整を行った。こうして8月7日（土）に訪問研修の行程案をつくるための実行委員会を、さらに8月21日（土）・9月4日（土）の2日に分けて事前学習会を実施することを決定した。また訪問研修の参加条件として、実行委員を含むすべてのメンバーには、この2日にわたる事前学習のうち1日以上参加することを義務付けた。これにより、都合のつかない者や目的意識が曖昧な学生などから辞退者が現れ、最終的に人数が絞られて17名の学生が参加することとなった。

参加者の学科別内訳は、政策：14名、文化：1名、環境：1名、教育（海士町でインターンシップを予定している4年生）：1名であり、また男女の内訳は男子9名・女子8名であった。一方引率の教員には、昨年担当した仲野准教授と筆者に加えて、チーフの渡部教授と藤田教授と児島准教授が加わった。昨年度は11名全員が政策の学生で、引率教員も地域政策の教員が2名と地域政策学科に集中した企画であったが、かくして今年度については参加学生も引率教員も学科を超えたものとなり、「学部全体を対象とする企画」という体裁を整えつつある。

（2）実行委員会と事前学習会の実施

8月7日（土）に実施された実行委員会では、まず委員の役職を以下のように決定した。代表：小山友寛、会計：田村奏恵・林真弘、委員：井上佳恵・小田理香子・久野大地・鷲尾勇磨（以上政策学科）・須藤匠（環境学科）。そして小山代表を中心に海士町の情報収集を行い、今年度の訪問研修の行程に関する大雑把な案を決定し、その内容を海士町側の窓口である総務課長の美濃氏に伝えた。その後、小山代表と竹川及び美濃氏との幾度かのやり取りの末に、以下の（3）の通りの行程が確定した。その内容は概ね昨年度のものを踏襲した形になっているが、今年のオリジナルの企画として、①島前高校の生徒との交流及び②商品開発研修生（Iターン者を受け入れる海士町独自の制度で、特別に公務員として採用され15万円の給与が与えられるが、仕事は原則何をしても構わないことになっている）との意見交換をプログラムに組み入れることとした。

お盆明けの8月21日（土）には午後3時から第1回事前学習会を実施した。7日の実行委員会からこの日までに行程案の練り直しもあったので、前半は再度集まったメンバーでその内容を検討しあった。後半には7日の実行委員会で割り当てたテーマについて、担当者から調べた内容を報告してもらい、あわせて質疑応答を行った。21日のテーマは隠岐の島・海士町の歴史と島前高校についてであった。さらに9月4日（土）の午後1時から第2回事前学習会を開催し、海士町の基本統計や地域活性化の取り組み、海士町の観光政策や自然環境の特徴といった幅広いテーマについて担当

者から報告してもらい、質疑応答をしながら情報の共有に務めた。

（3）訪問研修の行程と研修プログラムの様子

【訪問研修の行程表】

9月6日（月）	
6:10	大学本部前よりバス出発（青谷駅・道の駅北条経由）→8:30七類港着
9:30	フェリー出港→12:40菱浦港（海士町）到着 ＜昼食：キンニャモニャセンター＞
13:45	隠岐開発総合センター研修室（役場と同一敷地）に移動
14:00	レクチャー「海士町の概要と産業振興等について」 （講師）産業創出課長：大江和彦氏
15:00	山内町長に挨拶，山内町長・大江課長と意見交換
15:45	レクチャー「隠岐島前高校魅力化構想について」 （講師）隠岐島前高校魅力化プロデューサー：岩本悠氏
17:15	宿に移動→17:30隠岐自然村（宿）到着 ＜夕食＞
19:00	菱浦公民館に移動
19:30	公営学習塾（学習センター）にて島前高校生徒との交流会【ワークショップ】 （ファシリテーター）教育ディレクター：藤岡慎二氏
21:15	終了→宿に移動
9月7日（火）	
8:50	ミーティング（～9:30）→菱浦港に移動
10:00	海中展望船あまんぼうに乗船（～11:00）
12:00	＜昼食：島生まれ島育ち隠岐牛店＞
13:00	町内主要産業施設等の訪問（雨天のためバスからの見学が中心） （ガイド）産業創出課磯谷氏 （CAS凍結センター～隠岐牛農場～海士いわがき生産・海士御塩司所～明屋海岸～天川の水）
15:30	後鳥羽院資料館見学
16:00	宿に移動→16:15隠岐自然村（宿）到着
19:00	岩本氏・島前高校武藤先生・学習センター藤岡氏を招いてBBQ（～22:30）
9月8日（水）	
9:00	Iターン者・商品開発研修生との座談会（隠岐自然村） （Iターン者）隠岐自然村深谷村長，同スタッフ近見氏 （商品開発研修生）小室氏（地産地商課），鎌田氏（産業創出課）（～11:40）
11:50	＜昼食：亀乃＞
12:50	教員→島前高校へ（意見交換）／学生→キンニャモニャセンターへ（自由行動）
13:00	島前高校山根校長・岩本氏と引率教員による意見交換会（～13:20） ＜フェリー乗船まで自由行動＞
15:45	フェリー出港→18:00七類港到着
18:15	バス出発→21:00大学本部前着（途中道の駅北条，青谷駅経由）
21:10	解散

【研修プログラムの様子】

① 業創出課大江課長のレクチャー（1日目）



海士町に到着して最初に受けた研修プログラムは産業創出課の大江課長によるレクチャーであった。大江課長からは、海士町の基本統計データに基づきどのような地域課題を抱えているかの説明と、現在海士町が取り組んでいる経済活性化への様々な取り組みについての説明があった。レクチャーの後半には、出張から戻られた山内町長がご臨席くださり、山内町長自ら学生や教員からの質問の一つひとつ丁寧に答えていただいた。

② 島前高校魅力化プロデューサー岩本氏のレクチャー（1日目）



大江課長に続いて岩本悠氏よりレクチャーが行われ、島前高校が直面している厳しい現実の説明のあと、「人間力」を物差しとする海士町の地域共育のコンセプトや、それと関係する島前高校の様々な改革について詳しい説明があった。離島が直面する諸課題を克服し、地域社会を持続させるには、地域の総力をあげた人材の育成が不可欠だという理念のもとで、子ども議会や島丸ごと図書館構想など、地域に密着した教育が展開されている。また、今年の6月からスタートした公営塾による高校教育の補完的取り組みなど、次々と紹介されるユニークな教育プログラムについての説明に、学生・教員ともみな強く興味・関心を惹きつけられた。

③ 隠岐の国学習センター（公営塾）での島前高校生徒との交流（1日目）



今回の訪問研修で学生に最も大きなインパクトを与えたと言ってよいのがこの公営塾での島前高校生との交流であった。各テーブルに島大生と島前高校生が分かれて着席したあと、藤岡慎二講師がファシリテーターとなってワークショップが開催された。ここで高校生たちから将来ビジョンを聞かされた本学の学生たちは、そのしっかりとした内容に思わず数年前の自分と重ね合わせて大きな衝撃をうけることとなった。

④ 海中展望船「あまんぼう」での遊覧（2日目）



台風が接近する生憎の天候により、当初3日目の昼に予定していた「あまんぼう」での遊覧を急遽2日目の午前に変更した。船からの景色や船底からの海中の眺めは素晴らしかったが、台風の影響で激しく揺れ

る船の上で、当初元気だった学生・教員も次第に口数が少なくなっていった。



⑤ 町内主要産業施設や後鳥羽資料館の見学（2日目）

CASという特殊な冷凍技術を用いた岩ガキや白イカの販売、隠岐牛の生産やナマコの養殖など、Iターン者の活躍も相まって、新しい事業の創出が盛んに行われている。2日目の午後は、昼食で隠岐牛を賞味した後、これらの主要産業施設をバスで一気に訪問した。ただし台風の接近で風雨が強まり始めたので、いずれも外観のみの見学となった。これらの見学のあと役場近くにある後鳥羽資料館を見学した。

⑥ 台風が接近するなかBBQを敢行（2日目）



学生たちにとって最大の楽しみの一つは、海士町の海の幸をふんだんに使ったBBQである。海士町からのご厚意でCASによる冷凍岩ガキの差し入れもあり、豪華な食事に会話も弾んだ。また台風の接近で風雨が激しく吹き

つける中にもかかわらず、この場に1日目にお世話になった岩本氏・藤岡氏が駆け付けてくださり、高校生たちとの交流を思い出しながら和やかな交流の時間を過ごすことができた。

⑦ Iターン・商品開発研修生との交流（3日目）



台風が過ぎた3目の午前中は、宿舎の隠岐自然村に二人の商品開発研修生（小室氏・鎌田氏）を招き、さらに自然村の深谷村長とスタッフの近見氏にも加わっていただいて、みなさんから海士町へのIターンに関

しての動機や実際にIターンをしてみてもの感想などを伺った。深谷村長はかつて大企業で管理職を務めたエリートであり、近見氏も福岡県での小学校教員としての生活を辞してのIターンである。そのような人々が何故に海士町に移住したのかは大変に興味深い話である。また、小室氏・鎌田氏のお話から、役場や住民の印象として非常に包容力のある地域性があることや、商品開発研修生という制度が非常にうまく機能している様子が感じられた。

（4）島前高校への訪問

今回の訪問に際しては、地域学入門の一環としての教育目的だけでなく、様々な改革にチャレンジする島前高校との関係づくりも大きな目的となっている。島前高校魅力化の目玉の改革は、全国でも珍しい「地域創造コース」の創設であり、今年度より従来からの普通科が「特別進学コース」と「地域創造コース」の2コース制に再編されている。とりわけ「地域創造コース」の考え方は本学部の創設理念と同様であり、地域づくりのキーパーソンとして地元へ貢献しうる人材の育成が目的となっている。実際にコース別の教育プログラムが開始されるのは来年度の2年次からということで、今年度下半期はカリキュラム等の準備期間となっている。

先駆的なまちづくりを実践する自治体として全国的に名高い海士町において、まちづくりの具体

例やそれを実現してきたキーパーソンを間近に見ながら「地域づくり」を学んできた高校生たちが、より高度な学びを鳥取大学の地域学部求め、そして本学部で学んだ知識や技術を将来的に地元の海士町をはじめとする島前地域にフィードバックしてくれたならば、島前高校、鳥取大学、海士町そしてその学生自身のすべての関係者が幸福になれるだろう。それゆえ、昨年の訪問研修を端緒として、島前高校と本学部との相互関係を着実に築いていくことが重要だという認識のもと、本年度は引率教員の5名が、学生たちとは別行動で島前高校を訪問し、校長の山根氏・パイプ役となってくださった岩本悠氏とともに意見交換する機会を得た。

1時間余りの会談で、山根校長より改めて島前高校が取り組んでいる課題についての説明を受けた後、我々からはその課題への取り組みに協力する用意があることを伝えた。現段階では特に何をするとといった細部の議論ができる状況にはないが、このような対話を通じて島前高校側も鳥取大学側も、相互に連携を進めることで相互に大きなメリットが生じうることを、そして双方とも今後連携強化をさらに進めるという方向性について共通認識を持つことができた。

(5) 訪問研修を終えて

今回の訪問研修で特記しておくべきことは、昨年度が好天に恵まれたことと反対に運悪く台風の影響と重なってしまったことである。初日は小雨程度でほぼ影響はなかったが、2日目の朝のニュースで、その日の夜から最終日の午前中にかけて隠岐周辺を台風が通過することが事実となり、3日目のフェリーが全便欠航になる可能性が高まったのである。そして、2日目朝の時点で取りうる選択肢は、①2日目・3日目の予定を全てキャンセルしてすぐに帰路につくこと、②海士町での滞在を1日延長して台風が過ぎるのを待つことの二者択一であった。

そこで小山代表を中心に参加者全員でミーティングを行い、どうすべきかの判断を学生たちの決断に委ねた。筆者の個人的な予想は、追加の宿代などの金銭的な問題もあるため①（すぐに帰る）であったが、議論の結果学生たちが出した結論は予想に反して②（1日延長）であった。同時に筆者は、この結論に至るまでのメンバーどうしの議論を聞いて、初日の経験から学生たちの海士町に対する興味が非常に強くなり、その「学びたい」という強い思いが「延長」という答えを導いたことを理解し、今この瞬間に目の前の学生たちが確実に「成長している」ことを実感したのであった。

幸い台風は思った以上に早く北陸方面に進んだため、結果的に予定通りの日程で鳥取に戻ることができた。こうして学生・教員とも非常に大きな刺激を受けた3日間の訪問は、予定したプログラムを無事消化して終了した。そして次のステップとして、3日間の学びをレポートにまとめ、昨年同様にレポート集（「海士町訪問記2010」）を作成することとした。ただし何も指導が無い状態では適切なレポート作成も困難であるため、各自が草稿をまとめた時点で反省会を実施し、その場でプレゼンテーション行って参加者・教員からアドバイスを受け、それを元に最終的なレポートを作成するという段取りを決めた。

反省会は9月22日（水）午前9時より、17名の学生たちと5名の引率教員が再集合して開催された。学生たちは5分の持ち時間で最も印象に残った点を中心に発表を行い、発表内容や草稿の表現等について多くのアドバイスを受けた。発表において最も多く取り上げられたのは、公営塾での島前高校生との交流やBBQの際の岩本悠氏や藤岡慎二氏との交流であった。大学という閉鎖的な空間から飛び出し異質な人々と出会ったことが、自分のこれまでとこれからの生き方を否応なく考えさせる契機となって衝撃を覚えたものの、その内なるざわめきをうまく表現できないもどかしさも手伝ってより印象が強まったようである。

このもどかしさを何とかしたいという衝動は、言うまでもなく主体的な学びの原点であり、ここから彼らが新たな知見を吸収することが「成長」であるなら、反省会はまさに「成長の場」そのものである。その証左としてある学生は、本学部への進学をセンター試験の成績で消極的に決めたことを反省しながら、「今回の訪問を通じて地域学を学ぶ目的や楽しさが分かってきた」と発言したのである。当日までの準備や引率そして終了後のフォローアップに膨大な手間のかかる企画ではあるが、「地域学入門」のエッセンスをより深くより具体的に学生に伝えることができるという点ではこれ以上の機会はないだろう。海士町役場や島前高校との連携の可能性を含めて、訪問研修が持つ意義を改めて実感する次第である。

（文責・竹川俊夫）

9. 授業評価アンケートの結果概要

学生による「授業評価アンケート」は、リレー式やオムニバス式による共同実施科目に関しては対象外となっている。しかし、受講生の意識を探り参考にする意図から、2010年度も単独実施科目の項目のままで実施した。昨年同様に、ここでは平均値と自由記述欄のみを記す。

評価は、「5全くそのとおりだ—4そのとおりだ—3どちらともいえない—2そうではない—1全くそうではない」の5件式である。なお、今年度から「授業評価アンケート」が記名式に変わったので、前年度までの結果と単純に比較することはできないが、一応2009・08年度の数値を〔 〕内に示した。平均点は、地域政策学科「4.03」（回答件数51）〔2009, 2008年度は「4.20, 4.01」〕、地域教育学科「4.09」（50）〔「4.00, 3.97」〕、地域文化学科「4.05」（45）〔「3.99, 4.23」〕、同芸術文化コース「4.14」（4）〔前年度は集計区分外〕、地域環境学科「3.95」（47）〔「3.92, 4.01」〕であり、いずれの学科・コースからも4点前後のポジティブ評価を得た。

自由記述に関しては、学務支援システムでの集計が遅れており、ここでは1件のみを紹介するに留める。

「①良かった点：大学の外部から講師が招かれて話をしてくれる点。／②改善を求める点：先に結論を言えば、理論的なことをもっと詰めていくべきだと思う。地域学では、地域を『どうあるか』捉え、『どうあるべきか』思索し、より良い『地域を創る』ために行動することが求められると見聞した。しかし、講義では、『あるべき地域』をどのように設定・確定し、どのような手法をもって地域を変えていくのか、ということが語られていないように感じた。理論として、例えば『地域と共生することと地域を引っかき回すことの差異』を語るべきではないだろうか。なんとなくニュアンスとしては分かるけど…という状況はマズいだろう。現状のままでは、行動科学としての地域学が不十分に終わっている気がする。もしかしたら、一回生に対してそこまで理論的水準を求めているのかもしれない。それならば仕方がないが、私は現在の講義のそうした理論不足な点に歯がゆさを感じた。」

10. 初年次教育の側面からみた成果と課題

(1) 「初年次教育」とは

中央教育審議会は、2008年12月、「学士課程教育の構築に向けて」の答申を行った（以下、「学士課程答申」）。本稿の最後に、学士課程答申で示された特に「初年次教育」の視点から、2010年度における「地域学入門」の成果と課題を考察したい。

まず、同答申では「初年次教育」の用語を以下のように解説している。

高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもので、1970年代にアメリカで始められ、国際的には「First Year Experience (初年次体験)」と呼ばれている。具体的内容としては、(大学における学習スキルも含めた)学問的・知的能力の発達、人間関係の確立と維持、アイデンティティの発達、キャリアと人生設計、肉体的・精神的健康の保持、人生観の確立など、大学における教育上の目標と学生の個人的目標の両者の実現を目指したものになっている。

(文部科学省ホームページ掲載の学士課程答申p.62「用語解説」)

地域学部では、「学士(地域学)」の学位を与える上での教育課程の核(コア)として、「1年次前期・地域学入門(学部必修科目)―2年次通年・地域調査実習(学科別必修科目)―3年次前期・地域学総説(学部必修科目)―4年次・卒業研究」という流れを位置づけている。「地域学入門」は、まさに「新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの」である。

(2)「初年次教育」資料の配付

しかし、残念ながら、鳥取大学並びに地域学部に「初年次教育」の指針やガイドラインはまだない。そこで、学士課程答申に掲載された私学高等教育研究叢書(2005年)『私立大学における一年次教育の実際』からの引用資料「図表2-35 初年次教育の重要度」を印刷し、受講生に配布した(4月28日の第3回講義時)。スタッフ側の理解に留めず、受講生自身に「初年次教育」の用語や課題を知ってもらい、意識的に力量形成を図ってほしいからである。

昨年度も述べたが、そこに設けられた20項目を参考にすれば、「地域学入門」は、「学問や大学教育全般に対する動機付け」「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付け」「社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観の育成」「学生の自信・自己肯定感の向上」「大学への帰属意識の向上」などを意識した科目になっている。併せて、「青年期教育」の側面を加味したことも昨年通りである。

2010年度は、よりスキルのな項目に

2-35 初年次教育の重要度

	重要である(%)
レポート・論文の書き方などの文章作法	63.7
コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術	55.3
プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法	51.1
学問や大学教育全般に対する動機付け	50.2
論理的思考や問題発見・解決能力の向上	49.5
図書館の利用・文献検索の方法	47.6
読解・文献購読の方法	41.2
将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付け	31.0
社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観の育成	28.9
情報収集や資料整理の方法	28.5
受講態度や礼儀・マナーの涵養	27.7
学生の自信・自己肯定感の向上	27.7
大学内の教育資源(図書館を除く施設・設備・人員等)の活用方法	25.2
フィールド・ワークや調査・実験の方法	20.4
高校で学習する教科の補習教育	19.0
学生生活における時間管理や学習習慣の組織化	18.6
ノートの取り方	17.8
大学への帰属意識の向上	13.4
協調性の養成	12.7
集中力や記憶力の習得方法	8.2

【調査概要】

N=636学部 2001年10月～11月調査(学部長対象)

(出典)私学高等教育研究叢書「私立大学における一年次教育の実際」(2005)

も力点を置き、「レポート・論文の書き方などの文章作成」「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」「図書館の利用・文献検索の方法」等について、地域学入門でも意識的に指導した。

（3）「出席カード」の工夫

まず、「出席カード」を工夫した。200人余りの受講生の出欠を管理する「出席カード」であるとともに、一人ひとりが講義をどのように聴き、意見や質問を持つかということに留意した。

年度初めに配布した初版（A4判縦置き片面印刷）は、「【予習事項の発表】受講生代表者の発表についての感想や気づきの「メモ」。／【感想・意見・質問】今日の講義に関する感想・意見・質問・お礼など。＊1ヶ以上は「質問」がもてるように聴きましょう。／【深めてみたい事項】今日の講義で「さらに深めてみたい」と触発されたこと。」の、大きく3つの記載項目であった。これは、導入15分間の学生発表、60分間の講義、終結15分間の質疑応答・次回までの自習課題の提示という、90分の講義の流れに即した区分でもある。

6月2日の中間討論会において、足立教授より「異なる人々とコミュニケーションすること」の重要性が提起されたことを受けて、第3部に入ると書式を変更した。すなわち、第2版は「【Gによる講師紹介】紹介や事前学習への感想や気づきの「メモ」。／【意見や質問】「意見や質問」が持てるように「聴く訓練」をしましょう。／【自身の興味・関心にどう取り込みましたか】異なる領域とのコミュニケーションの成果を書きます。／【今日のお礼&さらに深めてみたい事項】今日の特別講義へのお礼&特別講義に関連してどのような事後調査や関わりを進めてみたいですか。」という4項目とした。

「出席カード」には、「本欄は、授業実践の報告書などに収録されることがありますので、予め了解ください（ただし、無記名かつ抜粋）」や「毎時間終了後に『学科別』に回収→『原本』は学科担当者が保管（出欠チェック）&『複写1部』が講師の方へ」という注記が下線を付してなされており、受講生に一定の緊張感を生んでいる。実際に、「カード」に記載された意見や質問に対して応答下さった講師（特別講師を含む）もあり、一方通行でない相方向のコミュニケーション・ツールになっている。

（4）「推薦図書」の提示

鳥取大学における講義2単位とは、「（対面講義2単位時間 [90分] + 自習4時間）×15回=90時間」の学修に対して与えられるものである。とは言え、リレー式ないしオムニバス形式の講義は講師が入れ替わる為に、ただ聴くだけに終わってしまいがちである。そこで、3回のレポートを課しているが、2010年度は毎回「1（2）冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと」を追加した。そして、地域学研究会幹事の協力も得て「推薦図書」一覧（次頁）を試作し配布した。そこには、「半年で何冊読破できるか挑戦しよう！」との鼓舞する一文も添えた。

学科世話人による中間討論会や総合討論会での指摘や「大学入門ゼミ」等での別途の指導もあって、レポートの中にも参考文献が次第に活かされるようになっていった。

（5）レポートに関する指示等の明示

レポートに関しても、年度当初に配布する「シラバス」に記載するだけに留めず、2010年度は毎

「地域学入門2010」推薦図書(新書&ブックレット等)

1. 地域のカー・食・農・まちづくり (岩波新書) 大江 正章 (新書 - 2008/2)
2. 森のカー・育む、癒す、地域をつくる (岩波新書) 浜田 久美子 (新書 - 2008/10)
3. (地域人) とまちづくり 講談社現代新書 中沢 孝夫 (新書 - 2003/4)
4. 福祉NPO—地域を支える市民起業 (岩波新書) 渋谷 智明 (新書 - 2001/6)
5. 地域再生の経済学—豊かさを問い直す (中公新書) 神野 直彦 (新書 - 2002/9)
6. 医療再生はこの病院・地域に学べ! (新書Y) 平井愛山、神津仁、ほか (新書 - 2009/5/2)
7. 地域再生の条件 (岩波新書) 本間 義人 (新書 - 2007/1)
8. 地域主権型道州制—日本の新しい「国のかたち」 (PHP新書) 江口 克彦 (新書 - 2007/12/16)
9. 「ふるさと」の発想—地方の力を活かす (岩波新書) 西川 一誠 (新書 - 2009/7)
10. 地元学をはじめよう (岩波ジュニア新書) 吉本 哲郎 (新書 - 2008/11)
11. ウェブが創る新しい「郷土」—地域情報化のすすめ (講談社現代新書) 丸田 一 (新書 - 2007/1/19)
12. 検証・地方分権時代の教育改革—大山市教育委員会の挑戦 (岩波ブックレット 685) 刈谷剛彦ほか (岩波書店) 2006/10
13. ルボ 高齢者医療—地域で支えるために (岩波新書) 佐藤 幹夫 (新書 - 2009/2)
14. 生老病死を支える—地域ケアの新しい試み (岩波新書) 方波見 康雄 (新書 - 2006/1)
15. 地域再生 まちづくりの知恵—古都・鎌倉からの発信 (平凡社新書) 福澤 健次 (新書 - 2007/3)
16. 地域学のすすめ—考古学からの提言 (岩波新書 新赤版(733)) 森 浩一 (新書 - 2002/7)
17. 市民事業—ポスト公共事業社会への挑戦 (中公新書ラクレ) 五十嵐 敬喜 天野 礼子 (新書 - 2003/4)
18. 奇跡を起こした村のはなし (ちくまプリマー新書) 吉岡 忍 (新書 - 2005/3)
19. 由布院の小さな奇跡 (新潮新書) 木谷 文弘 (新書 - 2004/11)
20. 沖縄力の時代 (ソフトバンク新書) 野里 洋 (新書 - 2009/3/17)
21. 変わる商店街 (岩波新書) 中沢 孝夫 (新書 - 2001/3)
22. コミュニティを問いなおす—つながり・都市... (ちくま新書) 広井 良典 (新書 - 2009/8/8)
23. 社会をつくる自由—反コミュニティのデモクラシー (ちくま新書) 竹井 隆人 (新書 - 2009/3)
24. 在宅ケアの教訓—リスクを回避し、ケアの質。 (Community Care Special) 編集部 (新書 - 2003/9)
25. 地域通貨と地域自治 (地方自治土曜講座ブックレット) 西部 忠 (単行本 - 2003/9)
26. 持続可能な地域社会のデザイン (TAJIMI CITY Booklet) 植田 和弘 (単行本 - 2005/5)
27. 堺学から堺・南大阪地域学へ—地域学の方法... (OMPブックレットNo.6) 乾 善彦 (単行本 (ソフトカバー) - 2006/8/10)
28. 関西・大阪・堺における地域言語生活 (OMPブックレットNo.21) 西尾 純二 (単行本 (ソフトカバー) - 2009/1/5)
29. 外国人労働者と地域社会の未来 (福島大学ブックレット『21世紀の市民講座』) 桑原 靖夫、坂本 恵、香川 孝三 (単行本 - 2008/11)
30. 障害者・高齢者と妻の郷のこころ—住民、そ... (居住福祉ブックレット) 伊藤 静美、加藤 直人、田中 秀樹 (単行本 - 2006/5)
31. 市町村合併と地域のゆくえ 岩波ブックレット 560 保母 武彦 (単行本 - 2002/2/20)
32. 脱「中央」の選択—地域から教育課題を立ち上げる (岩波ブックレット 662) 荻谷 剛彦、清水 睦美、堀 健志 (単行本 - 2005/10/5)
33. 地域通貨を知ろう (岩波ブックレット (No.576)) 西部 忠 (単行本 - 2002/9)
34. 地域政治・行政とモラル—市民参加を通じて... (グリーンブックレット) 鈴木 隆史 早川 誠 (- - 2010/1/20)
35. 地域からの挑戦—鳥取県・智頭町の「くに」おこし (岩波ブックレット) 岡田 憲夫、平塚 伸治、杉方 俊夫、河原 利和 (単行本 - 2000/10)
36. 開いて守る—安全・安心のコミュニティづくり... (岩波ブックレット) 吉原 直樹 (単行本 - 2007/1)
37. 個人のライフスタイルとコミュニティの自立 (沖国大ブックレット (No.11)) ジル・ジョーダン デジャーデン 由香理 (単行本 - 2003/6)
38. 子ども・学校・地域をつなぐコミュニティスクール 奥村俊子、貝ノ瀬 学事出版 2008/1
39. 東京遺産—保存から再生・活用へ (岩波新書) 森まゆみ / 岩波書店 2003/10 ¥819 (税込)
40. 「サザエさん」的コミュニティの法則 (生活人新書) 鳥越皓之 / 日本放送出版協会 2008/02 ¥693 (税込)
41. 離島生き残るための10の戦略 (生活人新書) 山内道雄 / 日本放送出版協会 2007/06 ¥735 (税込)
42. 農村の幸せ、都会の幸せ—家族・食・暮らし (生活人新書) 徳野貞雄 / 日本放送出版協会 2007/02 ¥777 (税込)
43. 農山村再生—「限界集落」問題を越えて (岩波ブックレット) 小田切徳美 / 岩波書店 2009/10 ¥504 (税込)
44. 生活環境主義でいこう!—琵琶湖に恋した知事 (岩波ジュニア新書) 嘉田由紀子/古谷桂信 / 岩波書店 2008/05 ¥819 (税込)
45. 人びとのアジア—民衆学の視座から (岩波新書) 中村尚司 / 岩波書店 1994/11 ¥735 (税込)
46. 東南アジアを知る—私の方法 (岩波新書) 鶴見良行 / 岩波書店 1995/11 ¥819 (税込)
47. 「里」という思想、内山節/新潮社、2005
48. 証言・町並み保存、西村幸男、坪正浩/学芸出版社、2007
49. 地元学からの出発—この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける、結城登美雄/農山漁村文化協会、2009
50. 群言堂の根のある暮らし—しあわせな田舎 石見銀山から、松場登美/家の光協会、2009

○講義2単位～「(対面授業1コマ [2時間] + 自習 [4時間]) × 15回 = 90時間」

○自習課題～例示として「50冊」をリストアップしました。半年で何冊読破できるか挑戦しよう!

○3回のレポート～自らが参照した図書を、「参考文献」として必ず巻末に記すこと。

回、意識づけのための指示を出した。

第1部の3回は意図的に4月中に実施している。4月は、新入生にとって大学生活をスタートしたばかりで緊張感のある月である。5月の連休明けに提出する初めてのレポート作成を直近の目標にして、内容が少し難しく多少分からなくても、「学問の府」らしく、まず「理論」「原論」的な講義に触れさせることに主眼を置いた。また、全国で初めて「地域学」という名称を掲げてスタートした地域学部に入學したのだという誇りやアイデンティティの形成もねらった。そして出されたのが、下記の指示文書である。

2010「地域学入門」第①レポート	2010.4.28.渡部
【第1回レポート（20点）】	
1) ～1冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと（レポートの末尾に参考図書に記載）。～	
・すでに何か読んでいますか？ 今からでも遅くありません。ファイト！！	
2) 課題：「地域学」とは何か…連休に帰省したら家族や友人から「地域学って何？」と尋ねられました。3回の講義をベースに、鳥取大学の考える「地域学」について簡潔に説明しましょう。	
・第1部の3回の講義で、それまでの自身の「地域学イメージ」がゆさぶられたり、崩されたりしたはずです。3回の講義との関連で、自身の変容を描けば、興味深いレポートになりますよ。	
・鳥大の考える「地域学」って、面白そうだな、奥が深そうだな…と感じたら、そこを手掛かりにレポートにまとめれば良いのです。	
・鳥取大学のHPにも沢山のヒントがあります。	
HPトップページの右横にある「映像で見る鳥取大学」をクリック	
～地域学部の個所を観ましょう。	
地域学部のサイトには「学部紹介ムービー」もあります。	
～学部紹介の文章なども要チェック！	
各学科のサイトも要チェック	
～特に学科紹介や、講義して下さった3先生の紹介やブログなど	
・ネット検索も役立ちます。	
良く似た言葉に「地元学」「郷土学」「エリア・スタディ」などがあります。	
～どのように類似し、また異なっているのか。	
「地域学」のキーワードで検索してみましょう～Google, Yahoo とともに	
・他大学に似たような学部やセンターはないのだろうか？ コンセプトの類似性と相違点は…	
岐阜大学「地域科学部」、金沢大学「地域創造学類」、山形大学「地域教育文化学部」	
北海道大学函館分校「人間地域科学課程」等々	
3) 提出：5/12（水）講義終了時	
・遅れないように！～「後出し」はナシ。	
4) ・・・初回レポートはワープロソフトの「書式設定」等の演習も兼ねています。	
体裁（書式設定）：A4判縦1枚、40字×43行横書き、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載、	
本文40行以内（参考図書の記載を含む）。	
・「書式通り」に仕上げる、印刷するという練習も兼ねています。	
・「言いたい内容を、定められた字数内で論ずる」ことも、重要です。	

第2部は地域連携活動を扱っている。そこで、「地域連携活動への期待と関与」を問う課題とした。

第2レポートからは「両面印刷」仕上げとなるために、書式設定はもちろん、分量が2倍となることへの対応、プリントアウトの工夫が求められる。第2レポートへの指示は以下のものである。

2010「地域学入門」第②レポート

2010.6.2.渡部

【第2回レポート(40点)】

1) (～新たに1冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと(レポートの末尾に参考図書を記載))

2) 課題: 「地域連携活動」への期待と関与…4～6回の講義においてどのような「地域連携活動」が提示されたかをまず整理した上で、地域学研究会のサイトで紹介されている「地域連携活動」も参照しつつ、鳥取大学の地域連携活動への期待や自らの関与について述べなさい。

・第Ⅱ部に限定せず、第Ⅰ部と関連させたり、中間討論会の意見交換で触発されたことを上手く採り入れて、レポートの構想を練りましょう。残すは「2週間」です!ファイト。

・地域学研究会サイト http://www.rs.tottori-u.ac.jp/kenkyukai/kenkyukai_outline/index.html
鳥取大学HPの研究教育の理念「知と実践の融合」

<http://www.tottori-u.ac.jp/dd.aspx?menuid=1245> も、大いに参照しましょう。

3) 提出: 6/16(水) 講義終了時 遅れないように!印刷も完了して講義に出席。

4) 体裁: A4判1枚の両面印刷, 40字×43行, 上3行にレポートタイトル・学科・学籍番号・氏名

・今回のレポートタイトルは、各自が自由につけて下さい。

・必ず1枚に両面印刷です(自動複写装置にかける為)。×ホッチキス止め等は破損します。

・「書式設定」は守りましょう。×字数・行数が設定されていない。

・指定行数の9～10割以内の分量を目安に仕上げる。推敲を忘れないように。

参考: 5月に提出した「第1回レポート」の評点の目安

◎評価が高い場合

・1～3回の講義を踏まえている

・3回の講義を単に要約するのみでなく、自身の考えが述べられている

・特に、受講前と受講後の変容が表わされている

×減点となる場合

・レポートに真剣に向き合っていない～内容が薄い、分量が少ない、丁寧に仕上げていない等

・ネットからのコピー等→研究におけるコピー=他者の作品の無断使用=「剽窃」は罪です。

・指定の書式設定や印刷ができない→特に2枚以上にわたるレポートは自動複写ができません×

・参考図書1冊以上の読破に挑戦していない 等々

第3部は、「地域づくり・人づくり」にかかわった実践や研究について、6回にわたる講義が設けられた。そこで、表面には6回の講義を関連づけてまとめ、裏面には「地域づくり・人づくり」への自らの志と今後の学習課題を述べさせた。講義を関連づけ、自らを問う作業とともに、参考文献も2冊以上となり、なかなかハードな課題設定である。第3レポートへの指示は以下のものである。なお、7月21日(第14回目)の総合討論会において、「レポートの書き方」に関する資料(『はじめてのレポート』抜粋)を追加配布した。

2010「地域学入門」第③レポート

2010.7.7.渡部

提出まで約1か月!

【第3回レポート(40点)】

1) 新たに2冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと(末尾の文献一覧に含めること)。

2) 課題：タイトルは各自が自由に設定する（大きな課題としては、「地域学」と「地域づくり・人づくり」）…地域学部では「地域づくり」や「地域における人づくり」に取り組む志と能力のある人材を養成します。「地域学入門」を受講して、どのような「地域づくり（人づくり）」に取り組んでみたい（または在学中に学習・研究してみたい）と思いましたか。「地域学」の可能性と重ねて述べなさい。

- ・「表」面→第1部で「地域学」とは何か！という理論的な側面を学びました。第2部では、地域連携活動を通して、実践的な側面を学びました。第1・2部の成果に立って、「表」面では、第8～13回の6回にわたる特別講義を各受講生なりに「関連付けて分析し、描いてみせましょう」。例えば、6回にわたる特別講義はそれぞれ、①どのような空間（地域の大きさ・切り出しレベル）における、②どのような主体たち（諸アクター）による、③どのような地域づくり・人づくり・関係づくり・幸せづくりであったのか…というように接近してみると関連付けることが出来ますね。諸君が第1・2部で身に付けた「地域学のツールやアイテム」によって、特別講義の諸実践がどのように関連付けて処理・理解・吸収されたのか、を切れ味鋭く示して下さい。
- ・「裏」面→裏面では、7/21の討論会も踏まえて、自身が将来どのような「地域づくり・人づくり」に取り組んでみたいのか、そのために在学中にどのような学習や研究をしてみたいのか、を熱く語って下さい。～ここに上記の参考文献2冊以上を活かす！

3) 提出：7/28（水）最終回の講義終了時

4) 体裁：A4判1枚に両面印刷。→ホチキス止め等は×（複写機で自動複写すると破れます）。・片面は「40字×43行」、最初の3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載、本文83行の9～10割の文章量を確保すること。

・文頭は一文字下げ、小まめに段落を区切る、句読点を打つ、等々。日本語の表記法の基本を踏まえること。

・主語に、「自分」を用いない。「筆者は」「私は」等々を用いること。

・短いレポートでも、「章立て」を行い（または「小見出し」を入れ）、巻末には文献一覧を載せると良い。

・附属図書館の入り口にて「レポート・論文の作成」という特別展示が行われている。

（6）口頭発表や討論の体験

講師が機器の準備をしている間を利用して、2010年度も学生代表の発表時間を設けた。昨年度と同様に、次週の発表者を事前に指定しておき（だいたい講義の月日の数字にあわせた各学科の学籍番号の者4～5人）、一人2～3分の発表を準備させた。予習事項の単なる紹介に留めず、新入生同士が知り合う良い機会と位置づけて、自己紹介などを盛り込むことも許容した。200余人を前に壇上に並び、マイクをもって数分間の話をする体験は、「出席カード」に感想や評価も記載されるので緊張感を伴うが、また爽快でもある。第1部では地域学部への進学動機を含む自己紹介、第2部では自己紹介とレポートの概要発表を主テーマとした。第3部に入ると、「事前調査隊」と銘打って該当学科・コースの4～5人を指名し、講師（特別講師を含む）等に関する情報を発表させた。回を重ねると、発表メモを作成してくる者や、配付資料を用意してくるグループも現れた。代表発表は11回にわたり行われ、およそ50名が壇上に立ったことになる。

「中間討論会」「総合討論会」の項で述べたように、討論会ではキャッチボールの楽しさを味わえるよう腐心した。「出席カード」には、発言できた満足感、発言はしたものの上手く伝わらなかった悔しさや、発言した友人を眩しく感じたり、発言できなかった忸怩たる思い、次回は必ず発言したいといった感想が、実に素直に記載されている。発言者は2回をあわせて、のべ35名であった。

(7) 残された課題

学科世話人に学級担任を重ねたことによって、討論会での指摘にもあるように他科目との連関が意識され、「地域学入門」以外の科目や日常場面での新入生支援に繋がったことは確かである。また、様々な地域連携活動や2種の訪問研修への参加呼びかけ、訪問研修への上級生の参加等、地域と繋がる活動の機会、上級生と新入生とがかかわる機会をより意識的に設定できたことも2010年度の成果の一つである。

課題としては、昨年度に指摘した事項がほとんど解決されずに残された。すなわち、出席カードの感想へのより頻繁な応答、レポートの添削後の返却、2回の討論会のような意見・感想の遣り取り機会の日常化などが挙げられる。これらの実現には多人数の「地域学入門」では限界がある。例えば、1年次前期に学級担任が併行して担当する学科ごとの「大学入門ゼミ」において、こうした応答・遣り取りをより充実させることはできないであろうか。ただし、学級担任の負担も考慮して、学級担任2名で「大学入門ゼミ」と「地域学入門」との主担当を分担した上で連携する工夫や、採点時間の節減のために第2レポートの分量を現在の両面から片面に減らす修正が必要であろう（第3レポートは執筆期間も長く、総括的なレポートであるので両面のまま継続）。

また、「地域学入門」の時間を活用して、地域連携活動にかかわる情報の提供にも心がけたが、多くのチラシの配布や頻繁なアナウンスは逆に雑多な印象を与えた。鳥取大学ホームページの「地域学研究会」サイトの日常的な活用、鳥取大学学務支援システムを通じた受講生への一斉メール送信など、工夫の余地があろう。新入生からは、地域連携活動の紹介・調整・相談・支援の窓口を鳥取大学に是非設けてほしいとの要望が出されていた。

最後に、鳥取大学として「初年次教育」の指針やガイドラインが、やはり必要であろう。その上で、初年次教育を意図した科目群においては、学生による授業評価についても「初年次教育の目標項目に対する達成度の自己評価」を加えるべきである。1年次必修の科目、例えば1年次（前期）必修の全学共通科目「大学入門ゼミ」「情報リテラシー」などと、各学部・学科で1年次（前期）に開設されている専門科目とを「初年次教育」として連携・連動させた鳥取大学として仕組み（個々の担当者の個人的努力を越えた仕組み）づくりも、今後の課題であろう。

《備考》本稿は、竹川俊夫が第6章第1節及び第8章を、足立和美が第6章第2節を、鶴崎展巨が第6章第3節を分担し、残余を渡部昭男が執筆した上で、渡部が全体を調整し取りまとめた。

《謝辞》本稿で紹介した授業実践は、本稿共同執筆者に留まらず、各回の講師（特別講師を含む）及び受講生等との共同作業の産物である。また、訪問研修では現地の関係者の方々大変お世話になった。ここに記して、感謝の意を表したい。

（以上、文責・渡部昭男）

（2010年10月6日受付、2010年10月15日受理）